

---

# 異世界魔王の小規模な日々

タカフミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界魔王の小規模な日々

### 【Nコード】

N0644U

### 【作者名】

タカフミ

### 【あらすじ】

ダイスケは、現代日本から異世界に『魔王』として転生する。チートだけど微妙な能力を持ち、小市民的な感覚が染みついて離れない。そんな彼が、魔王の従者たちや地元の間人たちと触れ合いつつ、わりと小規模な活躍をする話です。

## 序 - 1 : 唐突ですが、異世界です

季節は、まもなく夏の終わりへと移ろうとしている。

山間やまあいにあるこの小さな村でも、畑に植えられたさまざまな農作物が大きく育っていた。

麦や野菜が順調に伸びる様は、秋の実りを予感させている。

畑を縫うように作られた道を、荷物を積み込んだ粗末な馬車がゆつくりと移動していく。

確か粉ひき小屋のマドリクの息子が、となり村から嫁を貰うと言っていた。

お輿入れは明日あたりだと聞いていたから、その準備の品を運んでいるといったところだろうか。

「いい天気だなあ」

大樹が作る優しい木陰の下、頬を撫でていくそよ風が、とても心地良い。

故郷である日本の田畑の風景を思い出しながら、小島大輔こじまだいすけ（30歳：男性）はそんな農村の牧歌的な風景を、のんびりと楽しんでいた。

「まおつさま〜！」

小高い丘の上でごろ寝していた彼のもとに、子供が駆け寄ってきて

た。

よほど急いでいるのか。何度も当て縫いをした粗末な服を着たその子は、肩で息をしながらも、懸命に斜面を上がってくる。

「まおうさま、たいへん！　すぐ来てつて、みんなが！！」

「どうした、ニクサ。何かあったの？」

少年は、知り合いの農夫の息子だった。……というか、この小さな村では、知らない顔などいようがないのだけれど。

何事が起きたのか訊ねる大輔に、ニクサは乳歯が抜けてすきっ歯になった口を大きく開けながら報告する。

「たいへんだよ！　ムツサのおじさんの上に、木がたおれちゃって……！！」

「木の下敷きってことか？　そりゃ、大変だ。案内してくれ。ニクサ」

「うんっ」

慌てて腰を上げると、背後に声をかけた。

「急ぐぞ！　カズオ、ジローー！！」

“フンガ”などとは応えないが、連れ歩いていた2体の魔動甲冑<sup>リヒンゲアーマー</sup>は主の命令に従い、ギツチヨンギツチヨンと音を立てながら動きはじめる。

ゴーレムとしては素早いもののやはり鈍足である彼らを引き連れて、大輔は斜面を足もとに気を付けながら駆け降りた。

彼は、ちょっと目と鼻と口がデカイというくらいしか特徴のない、どこにでもいる日本人男性だ。

それがどうして『まおうさま』などと呼ばれ、魔動甲冑なんていうお付きを連れているのかは……事情の説明は、もう少し後のこととなる。

「こつち、こつち！」

荒い息をつきながらもすばしっこく走るニクサに着いていくのは、けっこう大変だ。

けれども、異世界であるこの地に来てからすっかり体力魔人となった大輔は、遅れることなくそれを追いかける。

小さな村をあつという間に通り抜け、反対側の林に入っただけくわいたところで、人々のたてる喧騒の音が耳に届いた。

「ムツサ、がんばれ！」

「痛っ、痛てえ、あああつ！」

大きな木が倒れ、その下で男がもがいている。

周囲に野次馬も含めて何人もが集まっているが、倒木をへたに動かそうとするたびに男が痛みを訴えて、手が出しづらく困惑しているようだ。

「お父さんっ、まおうさまをつれてきたよ！」

「え、あつ、魔王様だ！　魔王様が来てくれたぞ」

大輔の到着に気づいた皆は、口々に「お願いします」「助けて下

さい」と告げながら道を開ける。

よく確認すれば、ヒゲ面の大男であるムツサは、両脚を挟まれてしまっているようだ。特に右足は酷い様子で、あらぬ方向に曲がっているようにさえ見えた。

「う、ああ、魔王さま……頼んます、助けて下さい」

弱々しげに訴えるムツサにひとつ頷くと、大輔は魔動甲冑たちに訊ねた。

「どうだ、お前たちだけで持ちあがるか？ 難しそうなら、すぐにサブローを呼んで欲しいんだが」

サブローというのは、大型のストーン・ゴーレムの名前だ。動作はゆったりしているが、パワーについてはまさに百人力といっている。い。

だがカズオとジローは、『任せてくれ』とばかりに倒木に手をかけると、ググツと力を入れ始めた。

数人の男たちが、一緒になって手伝う。

「う、があっ、痛っ！」

木の振動が下敷きになった足に伝わるのだらう、ムツサが辛そうな声を上げる。

それを懸命に励ましながら、大輔はひとりの村人と一緒に彼の両腕を掴んだ。

はじめ倒木はピクリともせず、一瞬『持ちあがらないか？』という諦めの心が浮かびかける。が、やがてゆっくりとではあったが倒木がミシミシと音を立て、地面から浮きはじめた。

「もう少しだぞ……そらっ！」

掛け声とともに思いきり両腕を引いて、ムツサを木の下から救出する。

周囲から、ワツと声が上がった。

「おおっ、さすがは魔王様だ」

「ありがとうございます、ありがとうございますっ」

口々にお礼の言葉をかけられ、むず痒い気分を味わう。

だがこれで事態が終わったわけではない。

見ればムツサの脚は、やはりひどいことになっているようだった。

「こりゃ、たいへんだ」

村人の1人が呟くが、まったく同意見だった。

右足の膝から下が、前方向に曲がってしまったている。骨折は確実だし、もしかしたら神経や筋肉などまでが潰れて損傷しているかもしれない。

ムツサが助け出されて一度は安堵に包まれた空気が、ふたたび緊迫する。

「とにかく、担架を作って村に運ぼう」

「そうですね。おい、なにか布か、あるいは戸板を持って来きてくれ！」

大輔の言葉に応じて、野次馬の中から何人かが村の方に走り出そうとした、そのとき。

フワリ、と。

音もなく、天から白い影が、人々の前に降り立った。

## 序 - 2 : 白い魔女

「わっ!？」「ひっい!」

突然のことに、村人たちが驚きの声を上げる。

空から舞い降りたのは、白い　どこまでも白い、長い髪をした娘だった。

緩やかにウエーブがかつた豊かな白銀の髪は、腰までゆったりと流れている。

最上級の絹布のようにきめ細やかな肌は、やはり静脈が透けてみえるほど真っ白だ。

あまりに美しく整ったその顔は、見る者に冷たさを感じさせるほどだ。まるで芸術の神が自ら腕を振るって作った、彫像であるかのようにだった。

身につけている大きなつば広の帽子とローブも、やはり白。

ゆったりとした服を着ていても、その魅惑的な肢体を隠しきることなどできてはいなかった。裾からは長くほっそりとした四肢がわずかに覗き、胸元は柔らかい曲線を描いている。

雪か大理石を掘り出して造られたような姿のなか、ひととき映える淡紅色をした二つの瞳が、娘の登場で萎縮したように静まる周囲の様子を見渡す。

やがてその視線が大輔と合うと、娘は帽子をとり、優雅に膝を折って頭を下げた。

「ただいま戻りました、陛下。お求めの品、確かに譲り受けてまいりました。

まだ八チベエの背に乗せておりますが、屋敷の方に降ろさせます」

「ああ。おかえり、ユーリ。お使いごころうさま。それに、八チベエも」

空を仰げば、はるか高いところをゆったりと旋回する姿がある。

両翼を大きく広げたその影は、見る者が見れば竜族ドラゴンのものだとわかるだろう。

手を振ってやると、『キョーッ』という返事が聞こえてきた。

「それで、何事ですか？」

ユーリは顔を上げて帽子をかぶり直すと、わずかに眉をひそめながら村人たちに冷めた目を向ける。

その視線にたじろぐ彼らを庇うように、大輔は説明した。

「木が倒れて、そこにいるムツサが下敷きになってケガをしたんだ」

「ああ、なるほど」

説明されてはじめて、今さら気づいた、とでもいうように頷くユーリ。

ムツサのひどい負傷は、当然のこと視界に入っていたはずだ。

けれども彼女の態度は、あからさまに『あら、失礼。ただの村人がケガなどしていたところで、まったく興味がないもので。うっかり、気にもとめませんでした』といった感じで。

この場にいる人間たちで、相手をする価値を認めるのは大輔だけだ、とでも言いたげなものだった。

(いや、ユーリにとっては、本気でそんなつもりなんだろうなあ)

生まれてからついこのあいだまで、ずっと民主国家：日本の中流一般市民として生活していた大輔にとっては、彼女の態度にはため息をつくしかない。

村人たちの方からも、彼女を畏怖している空気が伝わってくる。

これは仕方がないことで、彼らにとってユーリは、何世代も前から妖魔として怯えてきた相手だった。親たちは我がままな子供に対して『良い子にしないと、山から白い魔女が降りてくるよ』などと脅しに使ってきたらしい。

加えて彼女の冷たい美しさも、素朴な田舎の住民を怯ませるには十分な理由となっていた。

「まあ、それでだ」

居心地の悪い場の雰囲気になら、大輔はユーリに言う。

「ユーリ。彼の脚を治せるか？」

「はあ……ですが治癒の魔法は、膨大な魔力を使います」

以前にも説明は受けたことがあったが、どうやらそういうものらしい。

治したり生み出したりする魔法は、破壊する為のそれよりも遙かに難しく、多大な魔力を必要とするそうだ。まあ、納得はできる原理・原則ではあった。

だが彼女が言いたいのは、そんなことではないだろう。特別な地位や能力を持つでもない、掃いて捨てるほどいる人間のうちの1体に対して、ユーリはわざわざ治療などする必要性を感じていないのだ。

いかにも気が乗らなそうなのが、はつきりと伝わってくる。

そんな彼女の赤い瞳をまっすぐ見つめながら、大輔は聞こえやすいようにゆっくりと、できるだけ落ち着いた声で告げた。

「帰ってきたばかりのところを悪いけど、頼むよ。お願いだから、彼を治してやってくれないか」

「……もちろん、陛下のご命令となれば、従うまでです」

ユーリにとって大輔の言葉は絶対だ。従順に一礼して、承諾の意を表す。

と、彼女は大輔にすつと顔を寄せると、耳元でささやいた。

「後ほど、魔力の補充はしていただけますね？」

甘え媚びるような響きが籠ったささやきに、ドキドキしながら頷いてみせた。

鼻腔を、ふんわりと柔らかかな、花のような香りがくすぐったりする。

大輔の応えに満足したように微笑むと、ユーリは苦痛の声をあげるのも忘れて怯えるムツサに近づき、潰れた脚に両手をかざした。

瞳とおなじく淡紅色をした唇を動かし、聞きとれないような小さな

声で呪文を唱えはじめる。同時に手のひらから穏やかな光が発せられ、脚を包んだ。

人々が見守る中、5分程の間そうしていただろうか。

『ふうっ』と疲れ果てたようなため息をつく、ユーリは立ち上がった。

「これで、大丈夫でしょう。まだ骨折は完治していませんし、半月ほどは添え木が必要でしょうが、障害は残らないと思います」

そう報告した彼女の身体が、ふらりと傾く。

大輔は慌てて腕を回して、顔色が悪い様子のユーリを支えた。本当に膨大な魔力を使って、主である彼の命令に従ったのだらう。

ゆっくりと地面に座らせたのとほとんど同時に、その身体に変化が訪れた。

見る間に、身体が縮んでいく。

裾からのぞいていた手足が布の下に隠れていき、胴体を覆っていた布地もへこんでいった。

ほんの10秒ほどの間に、ユーリの姿は成人したての娘といった年齢のものから、まだ小さな子供のものへと変わってしまう。

「よくやったね。ありがとう、ユーリ」

そう語りかけながら頭を撫でてやると、軽く頬を赤らめながら照れくさそうに笑い、少女は疲れ果てて目を閉じた。

やがて穏やかな寝息を立てはじめると、大輔はその白銀の髪を優しく梳りながら、ムッサに訊ねた。

「……どうです？ 脚は、少しはよくなりましたか」

問われた男は、傷の痛みと驚きに眉を歪めながら、慌てて首を何度も縦に振ってみせた。

「お、おう。まだ痛いけど、確かにずっと楽です」

「そうですか。ならよかったです」

若い女の子になってしまったユーリを両手で抱きかかえて、立ち上がる。

これで事態はひと段落ついたし、屋敷に戻って、早くこの娘を休ませてやりたい。

「ありがとうな、ユーリ。じゃあ、帰ろうか」

大輔の言葉に反応して、魔道甲冑のカズオとジローが後に着いて歩きはじめる。

その背中に、思わぬ声がかかった。

「ねえ、まおうさま。あしたのけっこんしきには、まおうさまもくるよね？」

振り返ると、ニクサがこちらをじっと見つめていた。

（そうか。粉ひき小屋の息子は、やっぱり明日が結婚式だったか）

無邪気な少年の問いかけに笑顔を浮かべてみせながら、応える。

「ごめんな。でも明日は大事な用事があって、どうしても忙しくてね。」

だから、残念ながら結婚式には出席できないんだ」

「そうなんだ……おしごと？」

「ああ。本当に、悪いんだけどね」

少年は残念そうだったが、大輔の言葉に納得したように頷く。

周囲の大人たちはそんな会話を黙って聞いていたが、やがて大輔たちが立ち去ったのを確認してから、ささやき合った。

「いやあ。魔王様だけなら、ぜひ一緒にお祝いしてほしいんだけど……なあ？」

「ああ。でもまかり間違えて、あの怖い娘っ子が来たりしたら、せっかくの結婚式が台無しだしな」

村人たちの会話は、もちろん大輔の耳には届いていない。けれども、そんな彼らの思惑は、当然のこと察していた。

もといた世界で勤めていた会社では、鈍いだの社交性に乏しいだのと評されてはいたが、それでも空気を読むのが重要とされる日本社会で、30年間も育ったのだ。彼らの口には出さない気持ちは、ちゃんと感じとっている。

（まあ、あとでお祝いの品だけは届けても、そんなに迷惑じゃあないよな？）

ユーリに買ってきてもらったのは、こんど結婚する鍛冶屋の息子へのプレゼントだった。

気軽に受け取ってもらえるよう、悩みに悩んで選んだのが、色彩豊かではあるが派手すぎないタペストリーだった。

新婚家庭の壁を飾るにはちょうどいいだろうと考えて、先日、街に出かけたときに商人に頼んでおいたのだ。

「急いでも、仕方がないしな」

腕の中であどけない寝顔を浮かべるユーリを見ながら、そう思う。いつかはきつと、自分とユーリたちが、大勢の人たちと一緒に笑い合える日が来るだろう。

そう願いながら大輔は、山をひとつ越えたところにある屋敷へと、魔道甲冑たちを従えながら帰路を歩いたのだった。

## 序・2：白い魔女（後書き）

こんな感じで、ヌルく、ゆったりとやっていく予定です。  
よろしくお願いします。

## 01: ネット小説のテンプレート

話は、数ヶ月前にさかのぼる。

\*\*\*\*\*

大型トラックに轢かれて、ふと気がつくと目の前に『神様』がいた。

「ごめん。小島くんが死んだのは、手違いだったんだ」

頭にいかにも神様っぽい輪っかをつけたその老人は、大輔に頭を下げてみせる。

「本当は、あと60年くらい生きる予定だったんだけど。ちよつといろいろと、確認不足とか、連絡不足が重なってねえ…ほら、ヒューマンエラーってのは、なかなかゼロにはできないものじゃない」

「いやちよつと待って下さい。ヒューマンエラーって…あなた、人間じゃないでしょ!？」

「いやあ、まあ、そりゃあそうなんだけどねえ」

大輔のツツコミに、神様は視線を逸らしながら白髪頭を搔いて誤魔化す。

「って言うか、間違いで死んだって……僕にだって、いろいろと予定があつたんですよ？」

なんとか彼女を作つて結婚して、子供も何人が育ててとか」

いや、予定というか、願望だけだ。

なにぶん、本日はちょうど30歳の誕生日をもつて『年齢』彼女イナイ歴』のままだけだ。

でも身長も平均はクリアしてるし、顔は目や鼻や口がデカいけど愛嬌があるし、給料は高くはないけど安定した会社に勤めてるし。まだ諦めたわけじゃあなかったのに。

「それに両親や妹だって、びっくりするだろうし！」

早く結婚しろとうるさい両親は飲食店を経営しているが、もういい歳だ。

ひとまわり以上歳下の妹は、生意気が鼻にツクけれども可愛いし、仲もよかった。

「でもね、もう、生き返るのは無理なの。即死だったしね。

頭の骨が割れて脳みそが潰れて、心臓も破裂しちゃってる人間が、元気に生き返つたらヘンでしょ？ ね？」

「ね？」……じゃなくてえ！」

そんなグロい死に方をしていたとは。

「いやいや、これでも悪いとは思ってるんだよ、ホント。だからできる限りフォローしようと思って、直接、小島クンに会いに来たんだ」

どうにも頼りなく汗をかきながら、神様とやらは言葉を続ける。

「とりあえず、後に残されるご家族のことは、心配しないで。

親御さんには健康長寿と、あとは金運上昇の加護をつけておくら。妹さんも、ちゃんと良縁と結ばれて、子宝に恵まれてしかも安産　ってなふうに約束する」

「まあ、それ自体はありがたいですが……」

「あと、小島クンの今後のことも、ちゃんと考えてるよ」

言われて、ちょっとドキリとする。

天国に行けるか地獄に行かなくちゃだとか、そういうことだろうか。

「悪いんだけど、さっきも言った通り生き返るのはムリなんだよ。

この世界の法則に反するからね、それは。

……だけれど、もうちょっと縛りのユルい世界にだったら、第二の人生をスタートさせてあげることできるんだ」

神様は、どこかで何度も読んだことがあるようなコトを口にしはじめる。

「なんか……ネット小説のテンプレそのままの台詞っすね」

「いやあ、“王道”って言うてよ。  
ちなみに、みんなが憧れるから、王道のストーリーになるんだ。  
好奇心はあるでしょ？ 剣と魔法のファンタジー異世界に生まれ  
変わって、そこで生活するとか」

「そりゃまあ、無くはないですけど……」

そのテの小説が世に溢れているのは確かだし、大輔もさんざん読  
み漁っていた。

「とりあえず、お約束通りに能力は強化しておくから。

慣れない土地で病気やケガは怖いだろうから、身体能力は上げま  
くって……とくに耐久性と防御力は不死身レベルまで上げとくね。

あと、なにかリクエストある？ 魔力無限大とか、国土無双の武  
術家だとか」

ちょっと考えて、それから言った。

「じゃあ、魔力無限大で」

便利な魔法の力で快適な暮らしづくり が、異世界転生モノの  
テンプレだし。

その答えに神様は頷くと、いかにもやっかいな仕事が終わったと  
ばかりに、ホッと息をついて笑顔を浮かべた。

「うん、うん。話はまとまったし、さっそくこれから向こうに送る  
ことにしよう。」

えっと、魔力無限大ってことは……あちらでの小島クンのステー  
タスは『魔王』ってことになるね。

はい、実行」

「え？ なんかいま、ステータスとかなんとか……」

へんなことを言われた気がする。

気のせいじゃなければ『魔王』とか。

「ああ、なに。これから小島くんが行く世界では、魔力無限大の存在は『魔王』しかあり得ない、ってことになってるんだ。

これは世界の法則上、仕方がないことだから。いいよね？」

「ちよ、ちよっと」

なんか、トラブルの匂いがする。

この神様、ヤバい感じた。どこかヌケてるというか、うっかりが過ぎそうだというか……。。

「待って、ちよ……」

慌てて抗議の声を上げようとするが、視界が急激に光で満たされて、目が開けていられなくなる。

どんだんと、どこかに運び去られているような、そんな感覚が全身を包む。

『良い人生をね』

最後に、明るくムカつく声がそう言ったように思えた。

\*\*\*\*\*

気が付くと、薄暗い部屋の中に立っていた。

どこかの地下室なのだろう。やたらと高い天井も壁も、床も、その全てが石造りだった。広いのにも関わらず閉塞感を覚えずにいられない。

壁の一部が、どういうカラクリなのかは知らないが、ボウツと光って周囲を照らしていた。

「長い間、お待ちしておりました」

目の前には、一人の少女がいた。

まだ小さい……というか、幼い。真っ白な長い髪と、やはりどこまでも白い肌をした彼女は、どう見てもまだ小学校低学年といったところだ。

だがあどけなさとは無縁な、冷たささえ感じるほどに整った顔は外国の人形に似ていて、どう見ても日本人には見えなかった。

白い髪で縁取られた白い顔の中、二つの赤い瞳が、こちらに向けられている。

「ユーリ・アタニア・キャベロスと申します」

ファンタジー映画に出てくる魔法使いのようなローブを着た彼女は、そう名乗ると床に膝をつく。

綺麗に波打つ髪が床につくのも構わず頭を深く垂れながら、よく

通る高いが落ち着いた声で、詠うたうように言った。

「ご復活を、心よりお祝い申し上げます。

この身と魔力の全てを捧げ、御身に仕えることを誓います……  
魔王”様」

「えっと？」

この唐突な展開に、大輔は何とも即答できない。

仕方なく、いかにも日本的な誤魔化し笑いを浮かべてみせるのが、精いっぱいだった。

## 02：年上の幼女

「……魔王様？」

冷たい石の床にひざまづいた幼女が、怪訝そうな表情でこちらを見上げている。

現実を受け入れようという諦めの想いが浮かぶ共に、さすがにこのままでは格好が悪かろうと認識して、大輔は彼女のことを改めて観察した。

たぶん、白子<sup>アルビノ</sup>というものだろう。

以前に見たことのある真っ白な孔雀の写真からは神秘的なものを感じたが、目の前の少女もそれと同様の美しさだった。

ちよつと現実離れた綺麗さだけでも、異世界に転生してきたという時点で、もう常識とか良識とかは無縁となっている。

(まずは、とりあえずこの子とコミュニケーションを結ばないと)

目をつむってひとつ深呼吸すると、少女の前の床に腰を降ろした。

「よ、つと」

「え……っ、ま、魔王様!？」

少女が驚いたような声をあげる。大輔が自分に対して身を折ったのが、全くの想定外だったようだ。

そんな彼女の反応はあえて無視して、話しかけた。

「はじめまして、ユーリ。」

僕の名前は、小島大輔っていうんだ。コジマが姓で、ダイスケが固有の名前……よろしくね？」

「は、はい。こちらこそ、どうかよろしくお願いいたします！」

子供と良好な意思疎通を成り立たせるには、まずはこちらが視線の位置を下げて、できるだけ同じ高さに合わせてること。そんな知識を掘り返しながら、低く落ち着いた声で語りかける。

「訊きたいことがあるんだけど、いい？」

「あ……ハイっ。わたしにお答えできることでしたら、なんなりと  
“陛下”<sup>へいか</sup>」

「いやはや、『陛下』ときたものだ。」

当然のこと、最低でも一国の主君、王様とかに用いる尊称だろう。まだ少ない情報から判断するに、この場の設定では大輔が魔王様で、この真っ白な少女はその下僕ってことになっているらしい。

「へんな質問に聞こえるかもだけれど。ここって、ドコなんだろう？  
街の名前とか、あとはこの建物のコトだとか。教えてくれないかな」

「え……あ、はい。」

ここはライトガルド地方にある、山の中腹です。そこに魔王様のご復活を祈って小さいながらも造られたのが、陛下のためのこの地下神殿です。

いちばん近い街は といっても本当に小さな村ですが ヨセナ村というのが、ひとつ山を越えた所にあります」

神殿とは、ね。

魔王というのは、神様あつかいされる立場なわけだ。

「そっか。」

あゝ、あと確認だけど。

日本……ジャパンとか、アメリカとか、チャイナとか。そういう国の名前って、聞いたことある？」

訊ねられ、ユーリは小首を傾げてみせる。

整いすぎた美貌のせいで冷たくさえ感じる外観が、その少女らしい仕草で柔らかみを帯びて、見ていてとても可愛らしく思えた。

「……いえ、申し訳ありません。そのような名の国は存じ上げません。」

ですが、わたしはあまりここから出たことがありませんので。聞いたことがないのは、わたしが無知だからかもしれません」

「なるほどね。……いや、ありがとう」

やはり、と納得する。

ここは大輔が生まれ育った世界ではないらしいと、ようやく理解させられた。

ユーリがいくら幼いとしても、アメリカを知らないというのはあり得ないだろう。

それともつひとつ。

目の前にいるこの少女は、見た目は10歳未満だけれど、受け答えを聞いているとそうは思えなくなってきた。

これなら、きっと自分の助けになってくれると感じられる。

「じゃあ、質問ばかりで悪いんだけど、次に……」

生真面目さと戸惑いの表情とを同時に浮かべているユーリに、大輔は色々質問していく。

それに対して少女は一つづつ、本当にありがたいことに忍耐強く、この世界のことを教えてくれた。

\*\*\*\*\*

アリトカロス大陸というのがあって、その中央を占める大きな国の名を“ルーベルス帝国”というらしい。

その帝国の端っこ、山ばかりで発展性のない辺境の地方が、このライトガルドという土地だそう。

「魔王様が権勢を振るわれていたのは、およそ200年前のこととなります」

よくある物語だ。

乱世に魔王が現れて、その圧倒的な魔力をもって世界を征服しようとした。

だが、やはり現れた勇者が、諸国をまとめてこの脅威に立ち向かい、ついには魔王を倒すことになる。

聖剣を胸に突き立てられた魔王は、塵芥ちりあくたへと化しながらも叫ぶ。

『我は、いつの日にか蘇る。そのときこそ、この世は必ず、魔王たる我がものになるのだ!』

そんでもって　これまたよくある話だけれど　最後に生き残った魔王の忠臣が、主君の残した予言に従うべく、いろいろと準備をするわけだ。

けっして敵に悟られない辺境の地に神殿を立て、最深には復活のための魔法陣を描き、さらには少しでも魔王の助けになるようにと、従者を用意しておく。

「生みの親である魔術師が逝って、160年ほど。ようやく、悲願の 때가訪れました」

「え？　ってことは、ユーリは160歳を越えてるの？」

「はい。年齢ということでしたら、180といったところでしょうか」

もつとも、自分のような魔造生命体ホムンクルスにとって、年齢は意味を為しません　と、子供の姿をした彼女は解説した。

それだけの年月を待ち続け、とうとう神殿の礼拝堂であるこの部屋に、魔法陣の中央に姿を現した者がいる。

しかも魔王としての条件、『無限の魔力を内に秘めている』というのをはつきりと満たした男だ。

相手の持つ魔力量を読み取る能力を持つユーリは、これは間違いないと判断した。

というのが、現時点らしい。

(よかった。だいぶ、状況が飲み込めてきたよ)

ファンタジーな世界での出来事として受け入れてしまえば、基本的には理解できる流れだ。

ふむふむと頷く大輔だったが、そんな彼に、ユーリがおずおずと質問してきた。

「あの……失礼でなければ、質問させていただいてかまわないでしょうか？」

「え？ もちろん。こっちも、答えられることなら、なんでも答えるよ」

「陛下は、記憶を失くしておいでですか？」

なるほど。

魔王が蘇ったと思って話してみれば、なんにも判っていない相手っぽい。

予想される事態の一つが、一度は死んで生き返ったことによる記憶障害か。

(さて、)

なんと答えようか、迷う。

ここで正直なことを言うと、ユーリに襲われたりなんてこともあるかもしれない。見た目は少女だが、180歳という人外が存在だ。危険なことになりかねない。

また彼女は現時点において、大輔にとっては唯一の頼り所だ。それを失うのは、怖くはある。

とはいえ、ここでウソをついて彼女を騙したとして、またすぐに別のウソを重ねなければならぬのは目に見えている。

こちら中期以上の視野で見れば、あまり良策とも考えづらかった。

「キミには悪いんだけど。どうやら僕は、魔王ではあっても、いま教えてもらった200年前に活躍した魔王とは別人だね」

「え……それは、どういうことでしょうか!？」

神様と出会ったときの話までするのはどうかと思ったので（ユーリにとっての神様は、敵かもしれないし）、そのあたりは黙っていることとする。

『他の世界で生きてきたが、ある事情から、この世界に魔王として蘇ることとなった』

といった、必要最小限でかつ嘘が含まれない説明が、妥当なところだろう。

「まあ、そんなわけで。

残念ながら、僕はキミに陛下なんて呼ばれる立場じゃない。

でも、キミの敵になるつもりもないから。だから、お願いだから嫌われないで欲しい」

### 03・はじめての風景

ユーリは、かなり戸惑っている様子だった。

それはそうかもしれない。160年以上待ち続けた魔王がようやく現れたと思つたら、想定していた魔王とは別人だったのだ。魔王など、そんなにちよくちよく現れる存在でもないだろうし。こんな事態は、想定外だったに違いない。

「混乱させて、ゴメンね」

声をかけると、白い少女はハツとしたように顔を上げた。

「あ……いえ、そんなことは」

「よければ、建物の外に出てみたいんだけど、いいかな？  
この世界の風景を、見たいんだ」

そう頼むと、ユーリは大輔を案内して歩きはじめた。  
まだ思案顔ではあったが、とりあえずは急に襲いかかってくることもなさそうだ。内心、ホッとする。

身長1mちよつとくらいの小さな白い影を追って、やや薄暗い中を歩く。

礼拝堂と説明を受けた広い部屋を出ると、ガチャガチャという音を立てる2体の大きな甲冑姿と出会った。

いかにも重そうな、頭のとっぺんから脚先までを鉄の鎧で覆った、フルプレートアーマーってやつだ。

ぶっちゃけ、こんな暗いところで出会うには、かなり怖い。

「神殿の護衛役、リビングアーマー魔動甲冑の1号と2号です」

「へえ。ってことは、中に人間は入っていないの？」

「はい。これはゴーレムの一種で、内部にある魔石を動力としています。」

この神殿を管理・守護しているのは、わたしを含めて、みな魔術で生まれた者たちです」

小さな地下神殿と説明を受けたが、廊下はけっこう長い。

途中で階段を昇ったり扉を抜けたりして、ようやく日光の下に出られた。

「おお〜」

神殿の入り口は、高い山の中腹、それなりに見晴らしのいい場所に設置されていた。

まずは新鮮な空気を思いきり吸い込み、それから周囲の風景を眺める。

人間の手がまったく入っていない、自然の山々。

木々が生い茂ってはいるが、やはりどこことなく日本の森とは違って見える。

下草があまりうっそうと茂っている感じではなく、イメージにあるヨーロッパの森、といった感じが。

緑の色も、どこことなく見慣れないものに思える。

雲だか霧だかが流れて、そうした山々が姿を隠したり、また現れたりしている。

こういう風景は、日本でも山の上の方で見たことがあったか。もしかしたら、海拔がけっこう高い地方なのかもしれない。

ふと隣にいるユーリに視線を戻すと、彼女はロープについているフードを、頭から被っていた。

なんだか眉をひそめて目を細めながら、大輔を見上げている。

「えっと、……なに？」

睨んでいる、というのは言い過ぎだろうが、あまり友好的な顔つきではない。

子供のものとはいえ、なにぶん怖いくらいに整っている分、不機嫌そうに見えるその表情はちょっと怖かったりする。

だが大輔のそんな反応に気付いたのか、ユーリは慌ててフードを深く被ると、軽く頭を下げた。

「すみません。強い光は苦手で……つい、目つきが悪くなってしま  
うんです」

「ああ、そうか」

確かに。白子<sup>アルビノ</sup>で色素が薄い彼女である。肌も目も、日光に弱そ  
うだ。

となれば今のは大輔を睨んでいたわけではなく、眩しさに目を眇<sup>すが</sup>めていたということなのだろう。

「こつちこそ、ゴメンね。気がつかなくて」

「いえ……」

そんな会話を交えていたところで、傍らで“ミシリ”と重そうな音が聞こえた。

「うわっ!？」

そちらに顔を向けて、小さく悲鳴を上げてしまっ。

巨大な影が、ゆっくりと動いていたのだ。

まさしく『巨人』というのがふさわしいだろう。体高が3mほどもありそうな、表面に粗さが目立つ石像が、ギシギシと音を立てながら身を起こしていた。

「これも、護衛役のゴーレム？」

「はい。外の見張りと、あとは野外での力仕事を任せるために作りました」

襲いかかってくる気配はないので、ひと安心していいのだろうか。

「“作った”って……ユーリが作ったゴーレムなの？ これ」

「はい。まだわたしを造った魔術師が生きていたころ、手伝ってもらいながらですけれども。」

先程の魔動甲冑たちもそうです」

となれば、この娘も魔術師としての能力を持っているということか。

どんな魔法が使えるかは知らないけれども、最低でも、こういう魔法生物を作る技能があるわけだ。それだけで、もの凄いいけれど。

(すげーなー、本当にファンタジーだよ)

もとの世界ではあり得ないものを目にして、ただだ驚嘆する。

「あの……ダイスケ様とおっしゃいましたね」

「うん？」

「これからの予定は、どのようになっているのですか？ 向かう場所や、会うことになっている方など。

この国の地理などにも、お詳しくはないご様子です。できる範囲内ででしたら、助力させていただきます」

気を使ってくれている質問に、苦笑いしながら答える。

「いやあ、それなんだけれどね。……実は、なぐんにも決まっていなくて」

「何も？」

「うん。とにかく、唐突にこっちにやって来ることになったから。この世界の国々についての知識とか、準備とか、予定とか。とにかく何にも無くて。

言葉が通じるのは、本当にありがたいけどね」

ユーリは幼い顔にきよとんとした表情を浮かべて、大輔を見ている。

それはそうだろう。これが逆の立場だったら、大輔だって呆れてものが言えなかったに違いない。

「この国では、どんなお金を使ってるかも知らないし……っっていうか、物品のやり取りはどうしてるの？ お金って、あるよね？ もしかして、物と物とを直接交換してるとか」

「いえ。もちろん貨幣は存在しますが」

「そうか。うん、そうだよな。」

まあ、ともかく。そんなふうに常識も何も知らないから、これからちよつとづつ情報を仕入れていこうというのが、今の予定といえは予定かな」

あの神様が言うには（という時点でちよつと心配だけど）、身体はかなり頑丈だし、まだ試してはいないけれど魔力も無限大だそう  
だ。

とりあえず人のいる場所に行ければ、その後はなんとかなるんじゃないだろうか。

それが異世界モノのテンプレだし、神様も王道ストーリー的設定にしといてくれたらしいし。

「いちばん近くの村っていうのは、どっち方面なんだろう？ 道とかあれば、ありがたいんだけども」

「……」

返事がもどつてこない。

ユーリの顔をのぞきこめば、目を眇すがめながらもボウツとするという器用な表情で、大輔のことを見ていた。

「えっと、ユーリ?」

「あ、はいっ。失礼しました」

ハツとしたように、居住まいを正す。

そして、おずおずとした感じで、口を開いた。

「その、もし本当に今後の予定がおりでないなら……大輔さま。よろしければ、わたしたちの主となつていただくわけにはいかないでしょうか?」

「……はい?」

あれ? さっき誤解は晴れたんじゃないか。

大輔は首を傾げる。

ユーリが待ち望んでいた魔王は、200年前に世界征服をもくろんだヤツで。それがいずれ、もういちど蘇るはずだと。

持っているステータスは同じ『魔王』とはいえ、大輔はソイツとは別人で。

だから彼女が待ち望んでいた主君とは、まったく関係がない。

わけがわからない、という想いが顔に出ているのだろう。

ユーリは「お願いします。話だけでも聞いて下さい」と、さっき地下神殿でしたように膝を折って平伏して見せる。

「ちょっと、そんな恰好しないで……いや、急ぐ用事があるわけじゃないし、もちろん話くらいは聞くよ」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

いや、そんな態度で出られたら、半ば脅迫されているようなものではないか。こっちが困ってしまう。

しかも、180歳は越えているらしいけれど、見た目は美少女だし。他の人に見られたら、あらぬ疑いをかけられてしまいそうだ。

「じゃあ、神殿に戻ろうか。こんな日向より、その方がユーリには楽なんですよ？」

「はい。お心遣い、いたみります」

ようやく地面から起き上がってくれど、ユーリが大輔を先導し、ふたりは再び地下神殿への階段を降りたのだった。

#### 04：責任者を呼んでこい！！

「わたしたちを、ダイスケ様にお仕えさせていただきたいのです」

本来は花瓶とかを置くためだろう台の上に、ちんまりと座ったユーリが、懸命さのあまり頬を軽く朱に染めながら訴えてくる。

ちなみに、彼女をそこに座らせたのは大輔だった。

さつきから、この娘はやたらと地面に平伏したがる。

どうやら主君である魔王に仕えるために生み出された人造生命体ホームクルスのようだし、創造主の魔術師からそういうふうに躡けられているのだろう。

けれどもそれでは、こちらが落ち着かないことこのうえない。

『子供と話すときには、視線の高さを近づけて』の原則に従って、ユーリをちよつと高い場所に座らせた。

こうすれば、椅子に座った大輔と、顔の高さはほとんど同じになるからだ。

「わたしとゴーレムたちは、魔石の力で動いています……しかし、その力も無限というわけではないのです」

この神殿を作った魔術師は、生前にかなりいろいろ準備していた。地理的に、ここは魔力が他よりも豊富に存在する場所らしい。それを利用して、地脈から魔力を汲み上げ、神殿とユーリたちを維持する仕掛けが作り上げられている。

だがそれにも、限界はある。

魔術師が死んで、もう160年。このまま行けば遠からず、ユーリたちは魔力が低下して機能を停止するだろうことは明白だった。

「ですが、ダイスケ様は魔王として、無限の魔力をお持ちです。

わたしたちの主あかしになって、その魔力をお分けいただければ、わたしたちもこのまま存在することを許されます」

「なるほど、ね。話は判ったけれども」

でも、定められた魔王でない者に仕えることに、問題は無いのか。そう訊ねると、ユーリは幼い作りの顔に似合わぬ寂しそうな表情を、ほんの少しだけ浮かべた。

「もともと、わたしは先の魔王様を存じ上げませんし」

であれば同じ『魔王』である大輔に仕えることに、さほど躊躇する理由もまた、無いのだ。

「うーん。確かに、僕にとってもありがたい話ではあるね」

右も左もわからない異世界に放り出され、困っていたところではある。行動の拠点となる場所を確保できてるのは、ものすごくありがたい。

しかもユーリは、ゴーレムを作って使役することのできる魔術師だ。

特殊能力として無限の魔力を選んだ大輔には、魔法の師匠まで確保できることになる。

(良いコトづくめじゃないか)

180年から生きている魔女と考えると、ちょっと怖い感じはするけれど。

でもこうして会話をしてきたかぎりでは、ヘンに残酷だったり、悪質な雰囲気は無い。むしろ綺麗な外観も手伝って、箱入り娘的な可愛らしさだ。

「幾つか、確認したいことがあるんだけど」

「はいっ」

一歩前に進んだ質問に、ユーリは顔を輝かせる。  
その表情は、やっぱり可愛い一言に尽きた。

「キミたちの主になったとして、僕は何か行動に制約を受けることはあるの？ 例えば、この神殿から離れられなくなってしまつとか」

「それは、もちろんだいじょうぶです。魔王様が復活した暁には、神殿はその覇道の出発点としての意味しか持たないはずでしたから。わたしも、王があらゆる国々を攻め落とすお手伝いをしながら、地の果てまでお伴するつもりでいました！」

いや、なんだか大輔にまで世界征服を期待されていそうで、これはこれで心配に思えてしまう。

地の果てにまで至る覇道とやらに向けて、なんだか目をキラキラさせているユーリ幼女の様子に、ちょっとだけヒキ気味になる。

「あ、あと。キミらの主になって、魔力を分け与えるってことだけ  
れど。」

具体的には、どうするの？」

「難しいことは、なにもありません。魔力をお与えいただければ、それが契約となり、わたしはダイスケ様の従者となります」

なるほど。

けれども質問に対する答えが、それでは半分しかきていない。

「具体的に、魔力を分ける方法は？ 僕はなにをしたらいいんだろ  
う」

「はい？ えつと、ですから魔王様の魔力を、わたしに向けて注いでいただければ……」

いや、そのやり方がわからないだよ、と。

なのに、なんだろう。ユーリはとても戸惑った表情を見せている。仕方がないじゃないか。魔法なんて存在しない世界からやってきたんだし。こちらにしてみれば、そんなに驚かれることではない。

「……ダイスケ様、たいへん失礼ですが。  
身体の中を廻るめぐ魔力の流れは、感じてらっしゃいますよね？」

「え？ 流れ??」

いや、急にそんなことを訊かれても。

身体を廻る力って、なんだか太極拳の気功とか、気脈の流れとか、そついうのを言っているのだろうか？

一応は自分の身体の様子を確認してみるが、日本にいたときと特に変わった実感は無い。

黙って首を捻る大輔の仕草に、ユーリの顔に不安げな表情が浮か

ぶ。

両手の人差し指を立てて大輔の目の前に持つてくると、左右の指先を近づけたり遠ざけたりしながら、訊ねてくる。

「その……失礼します。コレ、何をしているかわかりますか？」

「いや。なんだろう？ よくわからないんだけど」

素直にそう応えると、ユーリはとがつくり手を降ろす。そしていかにも『これからお伝えするのは、とてもお気の毒な内容になりますが……』というような、まるで患者や家族にガンを告知する医者のような表情を浮かべた。

「ダイスケ様……この世界には、魔法を使う才能を持つ者と、そうでない者がいます」

「うん」

「才能の有無はきわめて単純な条件で示されます。つまりは『魔力の流れを感知できるかどうか』です。

魔力の流れを知覚せずして、魔法のコントロールは不可能ですか  
「ら」

なんか、すごくわかり易い説明だ。

そしてだからこそ、大輔は彼女の言いたいことが、それが口に出される前に予想できてしまった。

「先程わたしがお見せしたのは、指と指との間に魔力を流していたのですが」

「……いやあ。ぜんぜんわからなかったよ」

「はい。つまりは」

ちよつと言い淀んでから、ひとつ小さく咳払いをした後、ユーリは告げた。

「ダイスケ様は、無尽蔵ともいえる魔力をお持ちなようですが……残念ながら、御自ら魔法を使うことはできない可能性が高い、という事です」

「……」

なんだそりゃ〜！？ 責任者出せ〜！！

（やってくれたよ、あの神様……っ）

無限の魔力で、快適異世界ライフ。  
その生活設計が根本的に崩れた瞬間だった。

## 05…よろしくね

『魔法を使う、才能が無い』

魔力は腐るほどあっても、それを使う魔術師としての資質がまったくありません。

まさに「猫に小判」「豚に真珠」だ。

これで『魔王』だとは………いつたい、どうしろと。

がつくりと落ち込む大輔に、慌てた様子のユーリがフォローを入れる。

「あ、でも、ご自身で魔法が使えずとも、従者であるわたしがご命令どおりにいたしますから。

魔力をわたしにお与えになり、魔法を使わせる。それで、解決じゃないですか」

あゝ、そうだね。うん。ありがとう。

なんとか気をもち直す。

少女の言う通りにすれば、この魔力も腐らす以外の使い道ができるというものだ。

そう考えれば、ユーリたちの主となって魔力を供給し、代わりに従者として仕えてもらうという案が、よけいに現実味を帯びる。

となれば、もう一度さっきの質問に戻るわけだが。

「それで、魔力を分ける方法だけど……」

「ダイスケ様が魔力を感知できるなら、その流れをわたしの方に向けて下さればよかったです。」

「ですが、このやり方がとれないとなれば、いちばん簡単なのは血肉を分け与えていただくことです」

「“血肉”って……」

「ちょっとビビる。」

「肉でも削ぎ落して、食べさせるといふのだろうか。」

「なにも怯えた顔をされなくとも。確かに魔力を奪う目的で、相手を食べる魔物や悪魔は存在しますが。」

「ですがもっとシンプルな方法があります。大丈夫です」

「具体的には？」

「体液を介するのが、一般的な方法です。その中でも血液は、魔力の伝導にはとても効率がよい物質です。」

「あとは、ダイスケ様は男性でいらっしやいますし、精液もこれに負けず劣らず」

「いやっ、わかった！　じゃあ、血液でいこうよ……！」

「そんな幼い外観をして、エッチな単語をしれっと思っんじゃありません！　聞いている方が恥ずかしいです。」

「だいたい、幼女の姿をしたユーリに対して、まかり間違っってそんな方法を実行してしまった日には。ロリペド変態野郎として、お天

道様に顔向けができなくなってしまう。

「血液って、どのくらいの量がいるの？」

「そうですね。個体によって同じ量の血液でも、含まれる魔力量は違いますので。まずは、数滴だけでもいただければ、ある程度の目安はわかるのではないのでしょうか？」

その程度で済むなら、悩む必要もない。

針を借りて指先をちよつとだけ傷つけ……ようとして、戸惑った。

「あれ？」

なんだか、針が刺さらない。

触った感じでは、きちんと尖っているのに。手ごたえ的には、皮膚が硬くて刺さらないといったふう。

それで改めて自分の手を撫でたりつまんだりして試してみるけれど、とくに変わった様子はない。普通の硬さの、人間の手だ。

「どうかされました？」

「ユーリ。針じゃなくて、よく切れるナイフを貸してくれないかな」

「はい。かしこまりました」

渡されたのは、なんだかイヤに禍々しいデザインのナイフだった。邪神を崇拜してる連中が、生贄いけにえの心臓をえぐるのに使いようなやつだ。

それをはじめは恐る恐る、その後はちよつとだけ力を入れて指先に滑らせるが、やっぱり傷ひとつつかない。

「なんだあ？」

そういえば。

『神様』の言っていたことを思い出す。

(たしか、『耐久性と防御力を上げておく』とか、なんとか……)

もしかして、大輔の肌は針やナイフでは傷つかないような、そんな丈夫なものになってしまっているのか？

牛だの馬だのの皮みたいに厚く硬くはなっていないし、魔法的ななにかだろうか。

なんにせよ、困った。どうすればいいだろう。

ここで試しにナイフを思いきり手に突き立ててみる　とか、そんな度胸は当然のこと存在しない。

「あの……ダイスケ様？」

不安そうで、同時に懇願するような表情で、ユーリが見ている。その表情を見て、なんとかしてやりたいと感じた。

(ええいつ、やってみるか！)

針やナイフがダメなら、自分自身の歯はどうだろう。覚悟を決めて、人差し指に前歯で小さく噛みついて、力を入れる。

「　ッ痛！」

しまった。ちょっと覚悟を決めすぎたかもしれない。想定した以

上に深く咬んでしまい、けっこう痛かった。  
傷口から血がタラリと流れ、指先の方まで垂れる。

「では、失礼します。……んっ」

赤い血滴ごと、指がユーリの小さな唇に啜えられた。

なんだか色っぽい鼻声とともにちゅうつと指を吸われると、幼女の姿をした妖魔相手に、背中にゾワゾワとしたものが走ってしまう。ヤバい趣味に目覚めてしまったのかと、頭を振ってその感触を追い払った。

「んちゅ……んう？ こ、これは、……あ、あああ!？」

「えっ?」

小さな悲鳴のようか声と共に、ユーリが両腕で自らの身体を抱きしめるようにしながら、ガクガクと震える。

台から落ちそうになるのを慌てて支えようと、大輔が手を伸ばす。その両腕の中で、少女の身体は淡く光りながら、見る間に姿を変えていった。

「な、なんだっ!？」

身体が、大きくなっていく。

それとともに腕にかかる重さも増し、支えるバランスも崩れ、二人は重なり合いながら床に倒れ込んだ。

なんとかユーリを庇い、大輔は尻もちをつきながら背中から転がる。

「うわつと……って、え？ え？」

やけに熱く、そして柔らかか感触が上に乗っている。  
とくに胸の辺りには、なんだかよくわからないが魅惑的に感じられる弾力が、押し付けられていた。

(えつと……)

事態が理解できずに、とりあえず身体の上のものに沿わせながら両手を動かすと『あん……っ』というやけに甘い声というか吐息と  
いつかが、耳たぶをくすぐった。

「……申し訳ありませんでした。重く、ありませんか？」

腕の中のユーリが、そう訊ねてくる。

なんとというか、確かにユーリの声ではあるけれど、さっきまでよりも心持ち低い気がする。

彼女が身を起こし、その拍子にサラリとした髪の毛の感触が、大輔の頬を心地よく撫でた。

「え？ ユーリ??」

「はい。ダイスケ様      いえ、魔王陛下」

かなりの至近距離で見下ろしているのは、真っ白な髪と肌をした、信じられないくらいに綺麗な『女性』だった。

年の頃は二十歳かそれより少し前といったところだろう。

やけに潤んで見える大きな赤い瞳が、大輔をじっと見つめている。

「どうしたの？ 急に姿が変わって……」

綺麗な幼女から、絶世の美女だか美少女だかに変化したユーリの前に、どうリアクションをしたものかわからない。

ただ心臓の動きだけが、反射的に早さを増していくのを自覚した。

「はい。もともとこちらの姿が、わたし本来のもんです。ですが、魔力が枯渇しかけていたので、身体を小さくして幼い子供の姿をとっていました。

陛下の血液により膨大な魔力を賜り、それがもとに戻ったのです」

さすがはファンタジー、この世界に来てからビックリな光景の連続だ。

ユーリは『失礼しました』と大輔の上から降りる。

(いや、そんなにすぐに降りなくても……。でもヤベ、僕、今すぐ顔が赤くなってないか?)

そんなバカなことが、頭の中をグルグル回りまくっている。

落ち着きを取り戻す前に、体勢を立て直したユーリが手を差し伸べてくれたので、とりあえず自分も起き上がった。

大輔が立つのを待って、ユーリは今日3回目、その足もとに膝まづく。

恭しげな仕草で手を取ると、額をそれに押しつけながら、白髪の美女は落ち着いた声で宣言するように告げた。

「わたしことユーリ・アタニア・キャベロスは、ダイスケ様を唯一絶対の主としてこれに忠義を尽くすことを誓います。

我が魔術の全て、そして髪の毛一本までこの身の全てを捧げ、御身のために仕えることをお許しください」

「……この世界の風習では、こういうとき、なんて応えればいいんだろう?」

ユーリは非現実的に整った白皙の顔を上げて、大輪の花がほころぶように微笑む。

「ただ、『許す』と。そうお応えいただければ、これ以上の歓びはありません」

「そうか。うん、わかった。『許す』」

彼女のその美しさと真摯さに吞まれてしまい、大輔は呆けたようにその口にする。

それからハッと理性を取り戻すと、慌てて付け加えた。

「こちらこそよろしくね、ユーリ。この世界で、いまの僕には、キミだけが頼りだ」

「もったいないお言葉、感謝します。陛下」

こうして『魔王』大輔の、異世界での生活はスタートしたのであった。

## 06：常識とか良識とか

とりあえずは地下神殿を案内してもらい、さらにこの世界について簡単な説明を受けた。

地下神殿は簡単に、礼拝堂と倉庫、魔術研究室、そして3LDKくらいの居住区域となっていた。

住民はユーリと、彼女が生み出したゴーレムたちだ。

「これら護衛用の魔動甲冑が1号と2号。外にいるストーンゴーレムが3号。それに雑用のために小型のウッドゴーレムが、4体います」

「名前は、1号から7号までってこと？」

「はい。その通りです」

魔動甲冑1号2号と共に、身長が1mを少し超える程度の頭の大きな小人みたいな外観の木製ゴーレムたちが、合わせて頭を下げる。こいつらが、4〜7号か。

「みんな、よろしくね」

彼らに心とか感情とかがあるかわかわらないけど、一応、そう挨拶しておく。

日本では人形だとか“人型”の物には魂がつきやすいとされるし、西洋のお話にだって知恵が欲しい案山子かがしが出てくるし。

「これから世話になるけど……なんか、1号2号じゃあ愛着がわかないなあ。

ねえ、ユーリ。コイツらに、名前とかつけていい？」

「え？ はい。もちろん、陛下のお好きに呼んで下さって構いません」

ユーリに承諾を貰い、ちょっとだけ考える。

「よし、じゃあ1号が『カズオ』、2号が『ジロー』だね。

ストーンゴーレムが『サブロー』で、4号が……シローじゃジローと間違えやすいし……そうだ『ヨツバ』『ダイゴ』『マゴロク』『ナナクサ』ってところにしようか」

けっこう安直だけど、いままでよりはマシだろう。

名前を付けられたゴーレム連中を見ると、表情も無いしはっきりとはわからないけど、なんとなく嬉しそうな仕草をしているように思える。

満足、満足。やっぱり名前で呼び合うのは、大事なことだ。

うんうんと頷いていると、腹がグくと鳴った。

そういえば最後に食事を摂って、もう半日くらい経っているかもしれない。腹も減るわけだ。

「何か、食べる物はある？」

訊ねると、年頃の娘といった外観になったユーリは、申し訳なさそうに答えた。

「申し訳ありません。ここにいるのは皆、食事の必要が無い者たちです。」

食料の貯蓄というのは、用意していません」

そうか。残念。

「すぐにでも準備します。近隣の村はとて小さなものですし、魔王様にご満足いただけるだけのものを“徴収”できるかは、心もとないですが……」

いや、ちょっと待て。

今、何か不穏な表現が混じったような？

「えっと、一応、訊くけど。」

食事を用意してくれるのはありがたいけど、どうやって手に入れてくるつもりなの？」

大輔の質問に、ユーリは『そんなことを質問されるなんて、思いもしなかった』といった表情と共に、あっさりと答えた。

「はい。魔動甲冑たちを伴い村に行き、手に入るだけの食料を“差しださせて”こようと考えています。」

あ、もちろんのこと。陛下の護衛としてサブローと、ウッドゴーレム4体を残していくつもりです。戦力的には、よほどのことが無い限り問題は起きないかと」

何を当たり前のことを。　　そういう表情で返答するユーリに、頭を抱えたくなる。

「あゝ、なんだ。ちょっと待ってくれないか？　……いや、今ので

キミらの感覚は理解できた気はするけど、ちょっとだけ考えをまとめる時間が欲しい」

「……はあ」

柔らかかそうな頬に軽く手を添え、不思議そうに小首を傾げる彼女の姿は、とても可憐が過ぎるもので。

その外観に、うっかりだまされそうだったというか、現実を忘れていましたよ。

「略奪は、ダメ！」

「え……となると、いったいどうすれば……っ!？」

どうやら力づくでの略奪というのが、選択肢の一つしかないデフォルトだったようです。

大輔の言葉に本気で驚きを隠せない様子のユーリに、ため息が出る。

「とりあえず、お金とか、あとは換金しやすい物ってある？」

\*\*\*\*\*

そんなこんなで、大輔は近隣の村に向かって、山中を歩いている途中だった。

お金については、神殿の奥に財宝があった。

呆れるくらい大きな宝箱の中には、まさに『財宝』としか表現のしようのない、金貨とか宝石とか、あるいは微細な彫刻が施された貴金属製の装飾品とか、そういうのがいっぱい詰まっていた。

（最低でも160年前の金貨みただけ……今でも使えるかなあ？）

ちょっと心配ではあるが、金ゴールドそのものの価値は、そうは下がらないだろう。

一応は、他にも比較的小さな宝石（といっても親指の爪くらいの大きさはあるけど）を幾つか持ってきた。

「もう少しで森を抜け、そうすれば村が見降ろせます」

その言葉通りに、森を抜けるとそこはちょっとした高台になっていた。

目の前には、山あいの土地を利用して作られた畑と牧場、それにレンガの家々といった牧歌的な風景が広がっていた。

「思ったよりも早く着いたね」

聞いていた話では片道が3時間くらいかかりそうだったのが、実際にはその半分くらいの時間で着いた。

山道を歩いていてわかったのだが、なんだか大輔の体力は、ものすごく上がっているようだった。急なこう配を早足で登っても、さして息も乱れない。

（そういえば、こっちに送られるときに『身体能力を上げておくから』って言われたっけ）

異世界に放りこまれた現状を考えると、ありがたいことではあった。

意外だったのは、魔動甲冑たちはともかくとして、ユーリもたいして疲れていなそうなことだった。

白子アルビノでもあるし、華奢な女の子でもあるし、さほど体力があるようには見えなかったからだ。

その感想を素直に口にした大輔に、娘は簡単に説明してくれた。

「陛下から頂いた、膨大な魔力のおかげです。」

わたしは魔法生命体ですし、魔力と体力はそのまま直結しているのですよ」

「なるほどねえ」

さてと。

一緒にやってきた面々を見渡す。

（たしか、ユーリとこいつら2体で、村に略奪に来るつもりだったんだよね）

ローブにフード姿のユーリは、まあ美人だし、なんとか許容内だとして。

魔動甲冑であるカズオとジローは、田舎の一般人にとってはかなり怖いんじゃないだろうか。

これから初対面の村人たちとコミュニケーションを取ろうというのに、彼らを連れていくのはマイナスにもなりそうだ。

「カズオとジローには、森の出口あたりで待っててもらおうか。村へは、ユーリと二人で行こう」

「しかし、それでは陛下の護衛が……」

難色を示すユーリに、笑って答える。

「でも、相手は普通の村人だし。ユーリだけだと、怖い？」

「もちろん、そんなことはありません！ 攻撃魔法は専門ではありませんが、たとえ兵士たちがいたとしても、そうそう遅れはとりません」

「そうか、じゃあ安心だね。頼りにしてるよ」

それに確認したところでは、危ないとなれば離れた所からゴールムたちを呼ぶことだって、可能だそうだ。

ただの田舎村でそうそう危険などないだろうが、これで万が一の場合も安心できる。

「じゃ、行こうか」

「はい」

魔動甲冑たちを木陰に隠れさせると、大輔はユーリを伴い、村への道を歩きはじめた。



## 07：いい天気ですね

なんとというか、初はつ端はなからつまづいた。

「こんにちは。いい天気ですね」

まだ家々からは離れた牧草地で、はじめに出会った村人に声をかける。

もちろん、笑顔は基本だ。軽く手を振り、友好と安全をアピールしたりもする。

初老と見えるその男は、いかにも昔の農民だか牧童といった格好をしていた。くすんだ金髪と茶色い瞳をした、人種的にはヨーロッパ系の白人というところか。

着ている服は古びてはいても清潔そうなものだった。元いた世界の中世ヨーロッパよりは、けっこう豊かなのかだろう。わりと衛生環境は、悪くないのかもと感じさせる。

「こんにちは。アンタがた、いったいどこから来たんだね……え？」

山の方から来た大輔たちを不審げに見ながら、それでも二人が近づくまでその場に留まっていた村民だったが。

会話できる距離まで近づいたところで、

「ひっ、ひいっ！ 『白い魔女』だああ!!」

ユーリの、ロープの中から彼を見る白い美貌を確認したとたん、

大きな悲鳴を上げてそのまま斜面を駆け降りていつてしまった。後に残された羊たちが、驚いて無秩序に走り回っている。

「え……っと」

歳の割にはあまりにも見事な逃げ足に、大輔も背中に声をかけるタイミングが無かった。

あっけにとられて眺めていると、途中で出会った他の村民を捕まえては何事か告げながら、家々の立ち並ぶ村の中心に走っていく。話を聞いた人々も、遠目にこちらを確認すると、やはり背中を向けてあたふたと離れていく。

「ユーリ……もしかして、この村の人たちに何かしたの？」

「いいえ。わたしの方からは、何も。」

ですが時々、何を考えているのか神殿に近づく愚か者もいますので。その場合にはお互いのためも考えて、少しばかり脅して立ち去らせることにしています」

「なるほど、ねえ」

「いったい、どんな脅し方をしていることやら。」

（もしかして、ひとりで来たほうが良かったかなあ）

大輔は隣を歩く従者に聞こえないよう小さくため息をつくとき、再び牧場の斜面を下りはじめた。

\*\*\*\*\*

村の中心、小さな広場となつてゐる場所にたどり着いた時には、みごとに誰もいなくなつていた。

皆、家の中からこちらを覗いている。

それだけならまだしも物陰には、どうにも棒とかを手に隠れている男たちまでいたりして。『怖いけれど、何かあつたら家族や仲間のために、俺も戦うんだ』とか、そんな悲壮な雰囲気かひしひしと伝わってきたりする。

「困つたなあ」

普通に、仲良くしたくてココに来ただけけれど。

本気で途方に暮れていた、そのとき。

立ち並ぶ民家の中でいちばん大きな建物の扉が開き、人影が姿を現した。

「とりあえず、僕が話をするから。ユーリは、辺りに注意しててね」

「はい。背後の敵は、お任せ下さい」

……いや、だから戦いたいわけじゃあないんだけどなあ。

出てきたのは、杖をついた老人だった。

見事な白いヒゲをたくわえた男性で、ヨボヨボとした足使いで低い階段を下りてくる。

「こんにちは。今日は、よく晴れましたね」

年寄りに、こちらから挨拶する。

本当は近寄っていった、段差を降りるのに手を貸してやりたいくらいだ。

けれどヘタにそんなことをして、その影で身構えている男が「爺さんを助ける！」とか言って襲いかかってきてても困るし。

敬老精神はひとまず置いておいて、適度な距離を取る。

ご老人はちよつとの間だけ大輔の目を見て、それから軽く会釈しながら挨拶を返してきた。

「おお、こんにちは。過ごし易い、いい日ですな」

よかった。とりあえず、まともな会話が成り立った。これを足掛かりに、大事に育てていかなくちやいけない。

世界は変わっても、基本的な礼儀作法は一緒だろう。軽く頭を下げて、自己紹介した。

「はじめまして、大輔・小島といいます」

この国では、名が先で姓が後にするのが一般的だと、ユーリに確認している。

「ダ、ダ……いや失礼。お名前、もう一度よろしいですかなあ」

「ダイスケ、です。遠い国から来たので、聞き慣れない響きですかね。」

今度、近くに引っ越してきましたので。それで、ご挨拶にやってきました」

「ほう。それはそれは、ごく丁寧に。  
ワシはこのヨセナの村長で、ハンスと申します。こちらこそ、よろしくお願いいたしますわ」

和やかに、話が進む。

「じつはそれ以外にも、買い物が多くて来たんですよ。食べ物欲しいんですが、食料品の店はありますか？」

「いやあ、ここは小さな村でしてなあ。そういう商店というものは無いですよ。」

村人同士、誰が何を作っているかはわかっとなりますからな。乳が欲しければ牛やヤギを飼っている家に、小麦が欲しければそれを栽培している家に行つて、わけてもらつと……そんな感じですかなあ」

「あれれ、そうなんですか。……じゃあ、どうしよう」

店とか、無いのか。それは困つた。何日かぶんの食料を、まとめ買いたかつたのに。

現時点でも、もうけっこう腹が空いている。

“ク~~~~”

あ、ヤバい。腹が鳴りだした。

「お腹が、空いてらっしゃるんですかな？」

「いやあ、お恥ずかしい」

あまりにもタイミングの良い腹の虫に、さすがにバツの悪さを感じてしまう。

頭を掻いて苦笑いしてみせると、村長さんの方も目元を緩めたのが見てとれた。

「家内かないに確認しましょう。我が家の食事かじでよろしければ、昼のスープが、まだ残っているかもしれません」

「あらあ？ それなら、ウチに来たらいいのに」

突然かけられた女性の声に、びっくりしてそちらを見る。ユーリも慌てているようだったから、たぶん気づいていなかったんだろう。

いつの間に広場の中に入ってきていたのか。ちょっと歳はいつているけど、そのぶん艶あつっぽい色気をもってます……という感じの女性だった。

赤い豊かな髪を結びあげて、胸元が開いた服を着ている。日本人ではなかなか有り得ないほどの魅惑的な谷間に、つい視線が行きがちになってしまう。

「アデーラっていうの。こんにちはあ」

この雰囲気の中に出てくるというのは、かなり肝キモの据わった女性なのだろう。

堂々とした美人さんで、なんか姐御あねごっぽい雰囲気をかもし出していた。

「この村で、小さな酒場を開いてるわ。お客さんだったら、いつだって大歓迎よう」

「あ、食べ物とか出る店ですか。それは助かります」

ほっとした。これで最低限の食事は確保できそうだ。

でも、村長の自宅に招いてもらったところだったし。どうしようかと目で訊ねると、ご老人は「構いませんよ」と言ってくれた。

「商売の邪魔をするわけにもいきませんしな。それに……ここだけの話、うちの家内の手料理より、アデーラの店で出るものの方が美味いでしょう」

「なんか、すみません」

最後の方、冗談めかして気を使ってくれた村長さんに、軽く頭を下げる。

まあそのうち、村長の家には何か手土産でも持っておじやましよう。いろいろ情報を教えて欲しくもあるし。顔をつなげたのは、とてもよかった。

「話がまとまったのであればあ、行きましようか？」

スカートを揺らしながら軽く身をひるがえしたアデーラの後ろに着いて、大輔とユーリは他に人気のいない村道を歩いた。

## 08：村の酒場

「どうぞ。カウンターのう、好きなところに座って」

連れて行かれたのは村の外れにある本当に小さな店で、5、6人座れるカウンターと、あとは小さなテーブルが2つといったところだ。

大輔は素直にカウンターに座るが、ユーリは「わたしはこちらで。食事もしりませんので」とだけ言うと、奥側のテーブルに陣取った。入り口も含めた店全体を見渡せる場所をと、護衛役として判断したのかもしれない。

「せっかくだから、何か飲む？　といってもう、ビールかワインかってなるけど」

「いやあ、まだ日も高いから。お酒よりも、とにかく何か食べる物をお願いします」

「あは、そうよねえ。おなか、空いてそうだったものね」

すぐに準備できるもので、と言って出してくれたのは、パンの乗ったカゴと、チーズとハム、豆を煮たものが盛られた皿だった。

「どうぞ」

食べ物がカウンターの上に置かれるとき、豊かな胸元が目の前にきて、ちよっとドキリとってしまった。

「ありがとうございます。それじゃ、いただきます」

その胸の谷間からちよつとだけ努力して目を逸らして、相手の顔を見ながら言うと、アデーラは「わかつてるわよ」とばかりに色っぽい笑顔を見せる。

いやあ。これは近所の親父<sup>オヤジ</sup>さんたちは、たまらないだろう。奥さんに白い目で見られながらも、つい店に通ってしまいそうだ。

(さて、と)

並べられたのが、とりあえず見た目が安心して食べられる料理だったことに、ホツとする。

異世界だし、食べていいのかわからないものが出てきたらどうしようかと、密かに心配していたのだ。

(あ、けっこうイケる)

口をつけはじめると、あとは会話も忘れてかき込んでしまった。店の窓や戸口からこちらを覗き込んでいる村人たちの視線も、気にならない。

料理は素朴、というか素材と塩の味がベースで、あとは少量のハーブが使われているといった感じ。

それが思ったよりは美味しかったのは、たぶん空腹のおかげだけではないだろう。

「ふふふつ、ホントにおなかが空いてたんだねえ」

アデーラの喋り方は、ときどき語尾が間延びする。なんだかそれが甘ったるくつて、ちょっと背中をくすぐられるような感じがする。

胸元が魅力的な美人だから、なおさらだ。

「すぐく、美味しいです」

「あらあ、嬉しい」

実際、あつと言つ間に皿を空にしてしまった。

「しちそうさまです……あ、そうだっ」

食べるだけ食べまくってから、いまさらになって気づいた。

「えっと、お代なんですけど……」

「え？ ヤダあ、まさかお金がないとか？」

半分、当たり。というか、日本であれば完全にマズイ。

持ってきた古い金貨などが使えるかとか、まったく確認していなかった。

恐る恐る金貨のうち一枚を出して「これって使えます？ 大丈夫ですか」と手渡すと、アデーラはびっくりした表情で受け取った。

「ちよ、ちよっと……金貨じゃない。あら、しかも本物だわあ」

軽く前歯で咬んでみて確認などしながら、目を丸くしている。

店の外からは、野次馬たちがやはりザワザワと驚いているのが聞こえてきた。

「困ったわ。こんなの出されてもう、お釣りなんてないわよ？」

「そうなんですか。でもよければ、受け取っておいてください。」

またきつと、御馳走になりに来ますんで。お代が溜まって、それで足りなくなったら言ってください」

「それは、よっぽどたくさん通ってもらわなくちゃあねえ」

綺麗な顔に苦笑を浮かべながら、そう言う。

こうして話をしている感じだと、アデーラはかなりしっかりした女性のようにだ。

せっかくなので、いろいろと質問することにした。

とても遠くから来た。この国の貨幣がわからない。仕組みを教えてください と頼んだら『素直なのはいいけど。それじゃ誰かにスグに騙されちゃいそうで、心配だわあ』と苦笑いされた。

カウンターのの上に幾枚かのコインを並べると、説明してくれる。

「これが、この国の貝殻貨と鉄貨ね。それとう、銅貨」

簡単に加工された貝殻と、いかにも粗悪な鉄で作られたコイン、それとこっちは結構しっかりした銅のコインだった。

貝殻貨10枚で、鉄貨1枚。鉄貨10枚で銅貨1枚だそうだ。

さらに銅貨10枚で銀貨1枚、その1000倍の価値が金貨……と  
いったところらしい。

さっきの食事は、鉄貨8枚くらい。ものすごく大雑把に仮定して、鉄貨が1000円くらいの感覚か。

だとすると今支払った金貨は、1枚で100万円くらい……確か  
に、そうそう出回るはずがない貨幣だ。こんな店で、それだけのぶ  
ん飲み食いするのは大変だろう。

「あと、まとまった食料を持って帰りたんですけど」

アデーラは笑って、「ここまで関わったんだから」と、野次馬で集まっていた村人たちと交渉してくれた。

しばらくして、小麦粉や豆が入った袋や、肉や魚の塩漬け、ソーセージ、卵、チーズといったものが店の前に並べられる。

「そつえばあ、手ぶらだったわよね」

気を訊かせて、荷物を運ぶための背負子つみこまで揃えてくれた。

「けつこう多くなったわね」

食料品をチエックしながら、アデーラが言う。

ちなみに支払いは、彼女がしてくれた。「大丈夫、ちゃんと計算して控えておくから」とのことだったので、お任せする。

ここでの買い物手段の無い大輔としては、ありがたい限りだ。神殿の財宝を考えれば金貨1枚ははした金だし、少しくらいボられてもまったく問題ない。むしろある程度なら、手数料として差し上げたいくらいだ。

「そつちの女の子は華奢そつだし、運べるかなあ？ 今日半分だけ持って帰って、あとは明日にでも取りに来る？」

「そうですね……でも多分、大丈夫です。」

ユーリ、ここにカズオとジローを呼べるかい？」

「はい。もちろんです。すぐに来させます」

ユーリは頷くと、軽く目を伏せてなにかを念じる仕草をした。

やがて村人のものらしい悲鳴と、ガチャガチャという金属音が近づいてくる。2体の甲冑姿が、早足といったスピードで近づいてきた。

「リビングゲアーマー魔動甲冑……っ!？」

アデーラが小さく呟きながら、少しだけ身構える。

緊張した表情は見せながらも怖がっては見せないところが、やはりただの女性ではないのだろう。

「お騒がせしてすみません。どうしても、荷物を運ばせたくて呼びました」

周囲の人々に頭を下げながら、そう説明する。

本当であれば仲良くしたい人たちだし、怖がらせるのはマイナスかもしれない。

けれども食事をするのに金貨を持ちだしたわけだし、こちらが金持ちだというのは知られてしまったわけで。

この話しが広まって、強盗に襲われたら面倒だ。大輔たちに手を出すとヤバい、というところは最低限でも見せておく必要性を感じたのだ。

ギツチヨンギツチヨンという動作で背負子を持ちあげる、カズオとジロー。

「こんな力持ちの連れがいるなら、もっとお酒でも買っていったくないかしらあ?」

警戒の色は保ちながらも体勢を立て直して、イタズラっぽい口調

でアデーラが言う。

「あ、そうですね。じゃあワインとビールも、お願いします」

小さな樽を一つづつ貰って、魔動甲冑に持たせる。

「じゃあ、今日はありがとうございました。村長さんにも、よろしくお伝えください」

もう日は傾いている。急いで帰らないと、夜の山を歩くことになってしまいそうだ。

アデーラと、距離を取ってこちらを眺める人々にそう挨拶すると、大輔たちは神殿へと向かったのだった。

## 09：試しに料理してみた

神殿に帰って荷物を広げると、あらためて、けっこうな種類と量があった。

「えっと、小麦粉、卵、これは塩か。あとはレンズ豆っぽいのと、これは何かのハーブに……おっと、これはハチミツかっ？」

かなり気を使ってくれたのか。

田舎の村でやつつけに揃えたにしては、バラエティに富んでしかもツボを得たラインナップが並んでいる。

さすがは酒場を切り盛りしている女の人かもしれない。これだけあれば、いろいろと料理に幅もつけられるだろうし、とくに見知らぬハーブ類は楽しみだ。

「陛下は、食品にお詳しいのですか？」

ヨセナ村からこっち、どことなくよそよそしい態度を取っていたユーリが、そう訊ねてきた。

「あ、そうだね。実家が、飲食店を経営していたから。」

手伝っているうちに、まあ普通の男よりは、料理に詳しくなったかもね」

「……そうですか」

気のせいだろうか？ まともに質問に答えただけなのに、その受け答えは余計に温度が下がった声に聞こえた。

理由はわからないが不機嫌そうな彼女に、ちょっと心配になる。  
なんで機嫌が悪いのか？　ここで女の扱いに慣れた男なら、どうするだろう？　考えてはみたが、30歳にもなつて彼女ができたことのない大輔に、まともな答えが導き出せるわけもなかった。

「え……えっと。ねえ、ユーリ。この神殿には、冷蔵庫……というか、“氷室ひむろはあったりする？”

「冷蔵庫というものは初めて耳にしますが。ですが、氷室であれば、似たようなものはあります」

こちらにどうぞ、と案内されたのは、奥にある洞窟だった。  
確かに、かなりヒンヤリしている。

「この、かなり奥の方まで行けば、夏でも氷が残っている場所があります」

天然の氷室といったところか。  
とはいえ先に進まなくても、この場所でも十分すぎるほど涼しい。  
というか、寒い。

「じゃあ、食品はここに運び込ませてよ。涼しくて、傷みづらいだろっし」

「かしこまりました」

次は、台所だ。

食事が必要な住民がいらないわりには、綺麗に整えられていた。  
多分、魔術師とやらが生きていたころと、できるだけ同じように

整えられていたのだろう。自分たちを生み出した主が死んでも、黙々とそうやってこの部屋を保ってきたユーリやゴーレムのことを思うと、ちよっとホロリとくる。

竈かまどに薪を組んで……火を着けようとして、困る。考えてみれば、マッチもライターも手元には無い。

「ねえ、ユーリ。火を着けるには、どうしたらいいだろう」

「……“火よ”」

ユーリが短く呟いただけで、その指先から小さな炎が燃え立つ。それを薪の下に置いた藁に灯せば、やがて火が勢いよく踊りはじめた。

「ありがとうね、ユーリ」

礼を言ってから、選んでおいた食材を手取る。とりあえずは、小麦粉に水と少しの塩を加えて練りはじめた。そのあとで鍋の底に油を敷いて、ベーコンを炒める。やがてダシとなる脂肪の油が滲み出てきたところで、ニンニクっぽい食材を投入。

香りがでてきたところで鍋に水を入れて沸かし、さらに野菜を加えて煮る。

「ユーリは食事はいらならしいけど、食べることもできないの？ それとも、食事を摂ことは、できるの？ 他のゴーレムたちは？」

「はい。摂食が可能かと問われれば、ゴーレムたちは無理ですが、わたしに関しては可能です。食べることはできます。」

ですがその必要のない行動を、あえて取ることは……」

「わかった。じゃあとりあえず、ヨーリの分は作るから。食べてね？」

「え？ で、ですから、生命活動のために摂食する必要は、わたしには無いと……」

その言葉を聞き流しながら、調理を続ける。

小麦粉を練って作った生地は、とりあえず平たいダンゴ状にして鍋に入れた。

並行して、デザート作りも行う。

ナナクサに頼んで洞窟の奥からもってきてもらったつららを砕いてクラッシュアイスを作ると、それと牛乳、卵の卵黄と八チミツを加えて、よく混ぜる。それとは別に、卵白にも八チミツを入れて泡立てて、メレンゲ状にした。

(というか、この台所、けっこう料理器具が揃ってない？)

食事に興味が無いヨーリと彼女を作った魔術師が使っていた台所にしては、泡だて器とかまでちゃんとある。

何もわからないから、とりあえず一式揃えた、という可能性もあるけれど。

ともかく最後に鍋に塩と、あとは味見をしながらハーブを加えて、出来上がりだ。

「よしっ、完成　　っ」と

洋風のすいとんと、デザートミルクセーキの出来上がりだ。  
すいとんは、スープ皿によそう。

ミルクセーキの方はジュースの上にメレンゲを乗せて、ミントっ  
ぽい香草をつけて仕上げてみた。

「じゃあ、ユーリ。一緒に食べようか」

「あ、あの……それは、ご命令でしょうか？」

どことなく恨めしげに言う彼女に、あえて笑顔で頷いてみせる。

「そうだね。1人で食べるより、2人で食べるほうが美味しいから。  
だから、食事に付き合ってよ」

はあ……と、ため息をついてから、ユーリはテーブルに向かい合  
って座った。

「わかりました。ご相伴にあずかります」

「よし。じゃあ、いただきます」

大輔が両手を合わせてそう言うってから食べ始めると、ユーリも慌  
てて「いただきます？」とマネをしてからスプーンに手を伸ばした。

「おっ、思ったよりは、美味いや」

適当にでっちあげて作った洋風《すいとん》だったけれど、意外  
といい出来だった。ベーコンから出たダシと、最後に加えてみたハ  
ーブが、よく合っている。

コショウが無いのが寂しい限りだが、仕方が無い。あと、醤油と



冷たいミルクセーキを飲み終えてしまったユーリが、残念そうな  
小声をあげるのに合わせて、大輔もカップをテーブルに降ろす。

「じつそうさまでした」

最後に再び両手を合わせると、その声に出して言ったのだった。

## 10：おやすみなさい

「ごちそうさまでした」

「う、……ました？」

名残惜しそうにカップを置くユーリの仕草が、ちょっとおかしい。見た目が絶世のクール系美女だから、よけいだった。

「……なんででしょうか？」

そんな大輔の視線に気づいたように、ユーリが背すじを伸ばし直す。軽く頬を赤らめているが、そこにメレンゲが付いて残っているのが、なんとも反則的に可愛らしかった。

笑いを噛み殺しながら、指でぬぐいとってやる。

「あ、し、失礼しました」

「お味はどうだった？ 気に入ってくれたならいいんだけど」

「……美味しかったです。ありがとうございます」

「よかった。じゃあ、また機会があったら作るうか。それにユーリが覚えたければ、作り方は教えてあげるから」

食器を片づけようとすると、どこからかやってきたウッドゴールムたちが、カチャカチャと手伝ってくれる。

「あ、あの、陛下は休んでいてください。あとのことは、ヨツバたちに任せて大丈夫ですから」

「そう？　じゃあ、ゆったりさせてもらうね」

椅子に座ると、酒があったことを思い出して、マゴロクに持ってきてもらう。

小さな樽ツルなのだが、どうやって開けたらいいのかわからずに首を捻る。

「あの、フタを割って開けるのではいけないのですか？」

「いや、一日じゃあ飲めない量だし。フタを壊しちゃうと、どんな味が落ちちゃいそうなイメージがあるしね」

記憶をたどれば、確か樽に穴を開けて付ける蛇口みたいなのがあったような？

あんなのが、この世界でも手に入るのだろうか。

「こんどまた出かけて行って、アデーラさんに訊いてみようか」

「……」

なんか、ユーリの反応がいまいちだ。投げかけた会話が、帰ってこない。

どうしたのかと顔を覗き込むと、彼女はわずかに視線を逸らしながら訊ねてきた。

「……陛下は、ああいった女性がお好みでしょうか？」

「えっと……はい？」

突然の質問に、意図がわからずにポカンとしてしまう。

「とても楽しそうにお話をされていましたし。ご命令いただければ、あの女性でも、あるいは同じような外観をした女性でも、神殿に拉致してくることも可能ですが」

「いやいや、ちょっと待ってよ。話が進み過ぎだつて」

そういえば、ユーリの口数が少なくなったのって、アデーラが現れてからだだった気もする。

「あの酒場の女主人。確かに、なかなか美しい女性でしたし……」

「いやだから、そういうのじゃないって」

「陛下を魅惑するだけの、豊かな胸元をお持ちのようでした」

「うぐっ」

しまった。胸の谷間に視線が行きがちになっていたのを、気づかれていたか。

……でもまあ、ユーリの機嫌が悪かった理由が、やっとわかった。

(ユーリとアデーラさんは、正反対だからな)

ユーリはほっそりと華奢で可憐な、清純そうな美人だ。知的で、クール系でもある。

それに対してアデーラは、魅惑的な胸元と腰つきをした、色気系

の美女だ。男慣れしていて、扱いも上手そうだし。

確かにこうして比べてみると、ユーリがアデーラに対抗心を持つ理由は、十分にあるように思える。

(それにユーリにとって、僕は特別なわけだしな)

生まれてこの方、180年間、待つことを命じられていた魔王だ。しかも生みの親の魔術師が死んでから、彼女が接する機会があった人間は、大輔が初めてなのではないだろうか。

そう考えれば、彼女の嫉妬も理解できる。

「確かにアデーラさんは綺麗だけど、そういう相手としては無しかなあ」

「それは、どうして？」

小首を傾げながら、けれども目は真剣に尋ねてくるユーリに、説明する。

「あのテの美人は、ちょっと怖いというか。実際にそういうことを考えると、腰が引けちゃうかな？ 歳もずっと上だし」

間違いなく、肉食性の美女だ。

まだ彼女も持ったことのないヘタレ男としては、ハードルが高すぎる。

(いやまあ、ホントにそういう機会がまわってきたら、お願いしたいとも思うけど)

口にしたのも本音だが、頭に浮かんだのも本音だ。  
後者の方は、とてもじゃないがユーリには話せないけど。

「年上ということでしたら、わたしも、大抵の人間よりは年上ですが」

「あはは、絡むねえ。でも外観的には、キミの方がずっと若いし」

……というか、出会ったときの彼女は、明確に『幼かった』のだけれど。

とはいえ魔力を補充した現時点では、かなりストライクなルックスと外観年齢をしている。

ここは素直に、そう言っておくか。

「好みというなら、ユーリみたいなタイプの方が、ずっと好みに近いかな」

「え……っ!？」

いやいや。だから、その『綺麗な顔にクールな表情を保ったまま、頬だけ赤くしている』ってなのは、反則だから!!

「と、とにかく。女の人を拉致してくるとか、そういう物騒な話はやしてくれよ。」

魔王がこんなで申し訳ないけれど、僕は基本的には小市民の生まれなんだから「

「小市民、ですか?」

ハツとしたような顔で、ユーリが訊ねてくる。

そういえば、まだ前の世界での話とかをしてなかったっけ。この世界に、魔王として生まれ変わったと。それだけの説明だったはずだ。

「そうだね……ユーリには、もう少し詳しく話しておいた方が良かったかな」

やっぱり『神様』については話すと胡散臭いだろうし、省くことにする。“神様”が“魔王”を送って寄こしただなんて、ややこしく感じられる。

自分が文化の発達した、豊かな国で生まれ育ったこと。教育を受けられない子供、食料に飢えた子供だなんて、存在することは知っていても、この目では見たことも無いということ。

戦争なんて、自分の身の回りでは、もう歴史上の出来事であること。それどころか強盗や、ましてや誘拐や殺人なんて、ほとんど全ての国民は身近なこととして体験せずにいること……

「そんな、夢のような国もあるのですか？」

「そうだね。でも、それは僕の両親や、その前の世代の人たち、さらにその御先祖さまが頑張ったからだけだね。」

ともかく、僕には暴力で欲しいものを手に入れるとか、そういう感覚は無いんだ。そのことは、覚えておいて欲しい」

ユーリはしばらく、大輔の話した内容を、胸の中で咀嚼しているようだった。

それからコクリと頷くと、「……はい。わかりました」と応えてくれる。

彼女の返事にホッとすると、なんだか急に疲れを自覚した。考えてみれば、今日一日、いろいろありすぎた。

「よければ、そろそろ寝させてもらっていいかな。開いているベッドとか、ある？」

「魔術師が使っていた部屋が、そのままの状態で整えられています。すぐにご案内します」

連れて行かれた部屋は、12畳くらいの広さだった。

壁の1つの面は、本棚で埋め尽くされている。いかにも魔術師の私室といった雰囲気だ。

ベッドに白いシーツがかけられているのは、やはり魔法が使われているのか。160年以上もつシーツというのは、ちょっと考えづらいし。

「狭いですが、こちらをお使いください。もし足りないものがあるようでしたら、なんなりとお申し付けを」

「いや、十分だよ。ありがとう」

そろそろ眠気も限界だし、あの柔らかそうなベッドに横になりたかった。

ところがなぜか、ユーリはなかなか立ち去ろうとはしない。

「まだ何か、あったっけ？」

「いつ、いえ。そういうわけでは無いのですが……」

どことなくモジモジとしながら、ユーリは扉の前で去り難げにしている。

その白い顔が、なんだかまた、赤らんでいるように見えた。

「その……へ、陛下はわたしを、ごっつ御所望ではないでしょうか……？」

言葉の意味が脳みそに染み込むまで、ちょっとした時間がかかった。

「あ、その、えっと……まあ、なんとというか。今日は本当に疲れていて、寝たいといつかなんとというか……」

ついそんな返答をしてしまった自分に、「このチキン野郎！」とツッコミを入れる。

でも、相手は今日初めて出会った、しかもとんでもない美人なのだ。

『30歳、年齢〓彼女いない歴』の大輔にとっては、いくらなんでもハードルが高すぎる展開だ。

「そつ、そうですね。あ、あの、それでは失礼します。おやすみなさい」

もっともユーリの方でも、かなりいっぱいいっぱいみたいだったし。

余裕の無い仕草で、顔を真っ赤にしながら退室する。

パタンと扉が閉じて、静寂が訪れた。

(……勿体なかつたかな?)

あせって断っておいて、そのくせ後になってそんなことを考えたりするところが、ヘタレのヘタレたる所以なのだろう。

(そういえば魔力の受け渡しについても、いろいろ言ってたっけ)

血と、それ以外には精液を媒介して与えるのが、効率が良いとか何とか。

そんなことを思い出していたら、よけいに明日からが期待と不安と焦りでいっぱいになってしまった。

「とにかく、寝よう！　なんとか、やっでは行けそうだし」

いきなり放りこまれた異世界で、しかもゴタゴタもあつたけれど、それでもありがたいことに、ユーリをはじめ、とても助けになる出会いに恵まれた。

「後のことは、明日になったら考えればいいか」

こうして異世界魔王・大輔の一日目は、幕を閉じたのであった。

## 11：ヨセナ村の秘密会議

「ともかく、何事も無く帰ってくれてよかったよ」

皆が寝静まった、深夜。

ヨセナの村では、村長の家にあつまる幾つかの人影があった。

「“白い魔女”と、それが付き従う男……か」

「向こうも仕掛けてこなかったし、村人が恐怖のため暴発することもなかった。今日のところは、ホツとしたな」

居間にいるのは老人と、それに男が2人と、女が1人。ランタンの光が、彼らの影を壁に映し出していた。

「で、店での様子はどうじゃった？」

老人は、広場で大輔を迎えた、あの村長だった。その問いかけに、アデーラはほつれた赤毛をかき上げながら、答える。

「そうねえ。こういつちゃなんだけどう、世間知らずのお坊っちゃんって印象かしらね。」

ただし

言葉を区切ると、真剣な目で他の面々を見渡す。

「あれはあ、間違いなくとんでもない“魔力”を持っているわ。吐く息からも、密度の濃い魔力が漂ってたわあ。」

あんなの、はじめて見た……普通じゃあり得ない」

「頼りなさそうな、人の良い若者」という評価は、ワシも同じじやったが。そうか。残念じゃが、やはりタダ者だったというわけには、いかんか」

困ったものだ。村長は、そうため息をつく。

もちろん大輔は30歳と、“若者”というにはちよつと年齢がいつていたが。ヨーロッパ系の白人に近い民族である村人たちから見ると、黄色人種モノコロイ種である彼はずっと歳下としか思えなかつたらしい。さらに平和ボケした表情が、よけいに村長やアダーラには幼弱そうに感じられたらしいが……こうした事情はもちろんのこと、まだ大輔にも村人たちにも、わかっていない。

「とはいえ、どう見ても荒事あらいごとに慣れているようには思えなかつたぞ。いざとなつたら後ろから一撃でやつちまえば、なんとかなるんじゃないか？」

ぶつそんな発言をしたのは、顔に傷がある片目の大男だった。身長は天井にぶつかるかというほどで、体つきもがっしりしている。服からはみ出した腕は、筋肉がよじれてグロテスクに見えるほどのものだった。

「アンタねえ。そういう若さにまかせた無鉄砲で荒つぽいやりかたはあ、もうとつくに卒業したはずでしょう？」

だいいち、一緒にいる魔女があ、それを許すかしらねえ」

「そうツスね。暴力でどうにかしようとするのは、ちよつとマズイかも」

呆れたように言うアデーラに、最後の1人である痩せすぎの若者が、頷きながら同意した。

「最後になって、リビングアーマー魔動甲冑を呼んだでしょう。アレって、いかく威嚇だったと思うんすよね。

“金持ちの、腰が低い若者だけど。でもナメて手を出したら、ソイツはタダでは済まないぞ”って。そう見せつけたんじゃないかな”

「そうね。言われてみるとう、私もそれに同感だわ」

口々に言われて仏頂面をする巨漢に、村長は話しかける。

「まあ、今のところは向こうも友好的に出てるんじゃないし、こちらから事を荒立てる必要はなからうよ。

とはいえいざとなったら、頼りにしとるぞ。ラスロ」

「ああ、任せろ」

村長の言葉に、大男は指をボキボキと鳴らしながら、頷いて応える。

「それと、エリック。お前さんの観察眼で、他に気づいたことはあるかのう」

質問を受けて、若者は顎に手をやった。

「気づいたことツスカ？……とりあえず、女に慣れてはいなさうかなあ。アデーラさんの胸に見とれてて、それがバレたら慌ててましたよね」

「なに、人の女房に……っ！」

とたんに額に青筋を立ててかなりたてはじめたラズロを、エリツクは呆れたように両手で押しとどめた。

「落ち着いて下さいよ、ラズロさん。別に奥さんに手を出したわけじゃあないツスし、女に慣れていなそうだって言ったでしょ。つか、ラズロさんだってあの場にいたじゃないツスカ。」

旦那の剣幕に、当のアデーラは澄ました顔をしている。

こんなことはよくある出来事で、だからラズロは、妻の経営する酒場には出入り禁止になっていた。

「肌や髪も日に焼けてるようには見えないし、手や体格を見ても、肉体労働の跡は見かけられない。品ひんもいいし、一般庶民の生まれ育ちじゃないでしょう。」

そのくせ、貴族や豪商の子息にしては腰が低くて丁寧だし、威圧的なのところが無い……はつきり言って、ピンとこないツス。

なにより、見たことのない民族の顔つきでしたしねえ」

そこまで呟いてから、村長に視線を戻す。

「ねえ村長。昔いた職場では、いろんな国の人間と交流があったんツスよね。ああいう顔の人たちがいる国って、どこか知りませんか？」

「いや。ワシも始めて見る、民族じゃったな」

「そうツスカ……まあ、アイツが人間である保証も無いんスけどね」

村の他の住民たちがこうした会話を耳にしたら、腰を抜かしていたかもしれない。

どう聞いても、普通の田舎の住民が話す内容ではなかったから。

4人は皆、この村の生まれではなかった。

ヨセナは辺境の地の、さらにその行き止まりに位置している。こ  
うしたことから、流れ者が最後にたどり着く地となることが、とき  
どきあるのだ。

昔から、ひと世代に1人か2人はそういう人間がいる。だからへ  
んに閉塞的ではなく、この村の慣習さえ守れば余所者も受け入れる  
という空気があった。

「ここはワシら余所から来た人間にとっても、居心地のいい村じゃ  
からな。その安全は、守らんと」

「ああ、そうだな。俺も女房も、腕はなまらせちゃいないぜ」

「もしあちらが仕掛けてくることになったらあ、そのときは焼き尽  
くしてやるわ」

「……自分も、いつでもアイツの背中をとれるように、よく観察し  
ておくツスよ」

彼らの目的は、みな一緒だ。

この村にたどり着いて、やっと得ることができた、かけがえのな  
い平穏だった。

それを破る者がいるなら、いかなる手段を取ろうとも排除する。

いっさいの情けも、手加減も、慈悲も、容赦も、けっしてするつ  
もりは無い。可能な限り迅速に、徹底的に、そういった要素は追い

払うか潰すかするのだ。

ここに集まった4人は、それが可能なだけの経験と能力を持った人間たちだった。

「じゃあ、もう遅いし。そろそろ、帰ろうかしら」

「うむ。では何かあったら、必ず報告はし合おうんじゃぞ」

部屋の中から、ひとつ、またひとつと影が消えていく。そうして最後に残った老人は、ランタンの火をふうつと吹き消したのだった。

## 11：ヨセナ村の秘密会議（後書き）

書きためていた分がかなり消化されたので、そろそろ更新速度が落ちるかもです。

でも頑張つて（楽しんで）続けますので、これからもお付き合いいただければ幸いです。

よろしく願います。

## 12：スタート順調(?)

1週間ほどが経って、身の周りもだんだんと落ち着いてきた。

大輔は神殿の内部を把握し、何回かに分けてユーリと、彼女を通してゴーレムたちに魔力を注いだ。

この甲斐あってか、魔動甲冑やウッドゴーレムたちは、なんだか表面がツヤツヤと輝いているように見えるようになった。ゴツゴツした身体を持つストーンゴーレムのサブローまでにも、同様の効果を感じる。

もちろんユーリも、相変わらず綺麗で可愛い。

村にも何度か出かけて、人々とのコミュニケーションを図った。

村長さんの家にも、あらためてお邪魔した。

牛乳と卵とハチミツを使って簡単なプリンを作って、手土産として持って行った。

一度目は失敗したけれどその後は上手く作れたそれを、村長さんと品のいい老婦人である奥さんは、目を丸くしながら食べてくれた。

「こんなの、はじめて食べたわ！　すごく美味しいっ」

目を輝かせる奥さんに作り方を教えてあげた。といっても材料を混ぜて、簡単に濾して、あとは煮蒸しするだけだ。

こうして村長さん宅の客間だけでなく、なんと奥さんの領域である台所にまでの侵入を果たすことに成功した。これでいつでも、気軽に訪ねてきても許されるだろう。

想定外の成果に満足する。

この国にある菓子の話聞いたが、やはりあまり食文化が進んでいないらしい。

甘味として使われるのは、フルーツや、はちみつ漬け、菓子パン的なものが主流らしい。上流階級でもそれは変わらず、せいぜい生クリームやバターをふんだんに使うくらいのことだ。

これはいずれ、商売にも利用できるかもしれない。

(これ以上は、あんまり作り方とか教えないうちにしよう)

そんなにレパートリーがあるわけでもないが、現時点で手に入る材料でも、クレープとかマカロンとか、あとはキャラメルとか挑戦できると思う。

上手くいけば、ひと儲けも夢ではないかも。

服も何枚か手に入れたが、どうしても古着になった。正直あまり着心地はよくないが、これも仕方は無いのだろう。

ヨセナ村は、食料はわりと(というかかなり?)恵まれているが、衣類はなかなか手に入り辛い環境らしい。古着を修繕しながら、大事に使っている。

物品の流通が発達していないと、手に入るものと手に入らないものの落差が激しいとは聞いたことがある。きっとこのあたりは、布地の原料を作るのに適していない土地柄なのだろう。

この村から、馬車で1日ほどかかるところに、少し大きめの街があるらしい。そこまでいけば、新しい服も買えるそうだ。

「そういえば、ユーリの服はどうしてるの? たまには買いに行っ

たりとか」

「いえ。ひと通り、魔術的な品であるものですから」

普通に着ている限りには、破れたり擦り切れたりすることはないらしい。

なので服を買い替えたことは、未だかつて無いそうだ。

「そうか……それはそれで便利だけど。でも街に行く機会があったら、新しい服をを買うのもいいかもしれないね」

「は……はいっ」

なんか、ちょっと返事に力が入っていた。興味は、すごくあるらしい。

(そりゃそうだ。女の子だもんな)

180歳という年齢ではあるが、この神殿に引きこもり続けている彼女だ。生みの親である魔術師以外とは、ほとんど交流もなかったようだし。

そのためか話をしていくと、彼女の中に老成した部分とやけに若い部分とが両在しているのを、たびたび感じさせられる。

基本的には見かけ通りの年ごろの女の子、として会話することにしてきた。

2回、3回とヨセナ村に通ううちに、住民たちもだんだんと慣れてきてくれた。

とはいえ、大輔たちを見たら慌てて身を隠すことは無くなった、という程度だけれど。距離を取って、離れた所から警戒しながらこ

つちを見ているといったところだ。

「あれ？」

何度目かの訪問をした、ある日のこと。村はずれの農地と牧場の境目辺りで、何人かの男たちが騒いでいるのに出くわした。

牛の首や角にロープをかけたらしながら、なにやら大声をあげながら奮闘している。

「こんにちは〜！ どうしました？」

彼らをあまり怖がらせないように、適度に離れた所から声をかけ、それからユーリ達を制すると大輔が1人で近づいていく。

ぎよつとした村人たちだったが、なんとか逃げ去つたりはせずに、その場に留まってくれる。

「ご、ご覧のとおりで。コイツが、溝にはまっちゃまって。自分じゃ出てこれないし、みんなで引っ張り出そうとしてたところで」

ああ、なるほど。

確かに、地面に（たぶん自然に）できた深めの窪みに、牛が入りこんでしまっている。当の本人も困った表情を浮かべていた。

それで男たちが、なんとか救出してやろうとしていたのだろう。テレビとかで似たような映像は見たことがある。

「けっこう、大変そうですね」

大きなオスの牛で、体重もかなりありそうだ。何人がかりでも、持ち上げるのはなかなか難しいだろう。しかも暴れるし。

さっき眺めていた様子では、作業はまったく上手くいっていないぞ

うだった。

「お手伝いしましょう」

「え……いや、そんな……」

うろたえている村人の反応をあえて無視して、ユーリたちの所に戻る。

「と、こんなわけで。カズオとジローも、手伝ってあげてよ」

「あの、失礼ですが。この者たちは陛下の護衛であって……」

ユーリは露骨に眉をひそめる。その仕草は、別に太陽が眩しいからというだけではないだろう。

基本的に、彼女にとって市井いっばんの人々は、触れ合う相手では無いのだ。魔王復活の暁には、踏みにじりながら征服すべき対象ではない。大輔が来るまでは、そうだったはずだ。  
『なんで、わざわざこんな連中の手助けなど、しなくてはならないのだ』

淡紅色の瞳が、そう語っている。

「うん、そうなんだけどね。でも困ってるみたいだし、見てるだけってのもナンだしさ」

魔動甲冑たちに助力を乞うと、『ガッテン承知シヨウチ』とばかりに頼もしく頷いてくれる。

彼らがぬかるんだ窪地の中に入ると、牛の持ち主は怖いけどさすがに逃げづらいです、といった表情で仲間の方を見ている。

その彼を促すと、大輔は一緒になって、やはり怯えた様子の牛の角にかけてロープを思いきり引つ張る。

「そら、頼んだ！」

『フンガ〜！』……とはやはり応えないが、カズオとジローはなんとなくそんな感じでした承の仕草をしつつ、思いきり牛を押しやりたり持ちあげたりする。

牛も懸命になって窪みのへりに前足を何度もかけて、そうしてとうとう脱出に成功した。

「やったあ……！」

達成感と共に、声を上げる。

村人は何度も頭を下げながら、助かった牛を連れて半ば逃げるように去って行った。

その態度が寂しくもあつたが、まだ今のところは仕方が無いだろう。そう考えて、大輔はこれでちよつとは交流が深まってくれるだろうと、成果を期待して満足する。

「さて。けっこう汚れちゃったね」

底がぬかるんだ窪みに入った魔動甲冑たちはもちろん、大輔も泥を被って汚れてしまっていた。

よく洗い流さないと、気持ちが悪い。

神殿に戻る途中に澄んだ川があるし、ちよつと冷たいけれどあそこで身体と衣服を洗おうか　そう考えながら、大輔はつぶやいた。

「やっぱり日本人としては、風呂が欲しいよなあ」

口に出してしまうと、よけいに願望が募ってしまう。

この世界に来てからこつち、タライよりはマシといった感じのバスタブにお湯を張って、そこで身体を洗う程度のことしかできていない。半ば行水（せんぱぎょうすい）といったところだ（ユーリが身体を洗うのを手伝ってくれようとしたけれど、慌てて断った）。

それでも贅沢な方で、村人たちはそれこそタライで汚れを拭っているくらいだろう。

日本生まれの、日本育ち。

大輔にとっては、あんなものは風呂とは認めかねる。ゆったりと湯に浸かれる風呂が、どうしても恋しい。

（神殿に帰ったら、どうにか計画を練ることにしよう）

芽生えた小さな野望を胸に、ぐっと拳を握りしめたのであった。

### 13：夢の源泉かけ流し露天風呂

「風呂、ですか？ 使っていたらいているバスタブとは違う？」

やはりこの国では、真の意味（日本的）での入浴という風習として無いらしい。

ピンとこない様子のユーリに、説明する。

「そう。ゆつたりとお湯に入れる、そういうお風呂だ。

温かいお湯に肩まで浸かって、心地よい感触に全身をゆだねるんだ。重力の束縛から半ば解放され、どこまでも脱力しながら心身を清潔にリフレッシュさせる。

お風呂ってのは、本来そうあって然るべきものなんだよ！」

「はあ……そのようなものですか」

つい力説してしまうが、ただの言葉だけでは、ユーリにはその素晴らしさが伝わりづらいようだ。鈍い反応がもどかしくてしかたがない。

（かの芥川龍之介でさえ、『風呂に入るのは簡単でも、それを言葉で表現するのは難しい』ってなコトを言ってたしな）

やはりここは、実体験してもらわなくては！ と、具体的な計画を練りはじめる。

「方法としては、今よりも大きな湯船を確保して、そこに沸かしたお湯を運んで流し込むのがいちばん楽だけど。……なんとなく、違う気がするんだよなあ」

ゴーレムたちの腕力があれば、けっこうななんとかなってしまいうのだが。

でも、どこか風情ふせいに欠けるような気がしてならないのだ。

「となると、五右衛門風呂……はドラム缶とか大釜とか、鉄で作るのが大変そうだし。」

木製の大きな樽で風呂を作るのも、外側に火でお湯を温めるボイラーみたいなを取りつける必要があるか。これも、作成がめんどくさそうだ」

こうして、いざーから日本式の風呂を作ろうとすると、なかなか難しそうなことに気が付いた。

「いつそ、どこかに温泉でも湧いていれば、最高なのになあ」

大輔がもらったその呟きを聞きつけ、ユーリが訊ねてきた。

「温泉というのは、熱い湧き水……というか湯のことですか？」

「うん、そういうヤツ。この国にもあるの？」

期待を籠めた質問に、ユーリは頷いて教えてくれる。

「はい。この神殿の近くにも、そういったものがありますが」

「えっ、本当に！？ やった。すぐに行けるところかな」

案内されたのは、神殿から歩いてほんの5分くらいのところだった。

小さな岩場の中にボコボコと音をさせながら、湯気の立つ温泉が湧き出ている。流れの伝う辺りの石を硫黄いおうの色に染めながら、すぐ脇を流れる小川に注いでいた。

流出量もそれなりで、手を浸すには熱すぎて火傷しそうなくらいの温度があつた。

これは充分に利用できそうだ。

「すごいよ、コレは。ありがとうね、ユーリ！」

「え？ あ、いえ。陛下に喜んでいただけで、わたしも嬉しいですよ。両手をとって感謝を述べると、頬を赤くしながらも戸惑って応える。

どうも彼女には、この源泉の素晴らしさが理解できていないらしい。あまりに勿体ないことだった。

それにしてもこの神殿は、なんと素晴らしい立地条件にあることか。

裏手には氷室として使える洞窟、そして傍そばには温泉も湧きでているだなんて。

一瞬だけ神様に感謝したくなつたが、その実際に知り合った『神様』を思い出して、止めておくことにした。

「とにかく、これを利用しないってのは無いね。

できれば大きな浴槽を作って、こっちのお湯と小川の水を流れ込ませるようにして……」

せつかくの温泉だ。

これは何日かけてでも、満足できる仕上りの露店風呂を作りた

い。

「よづしッ、やるぞ〜」

この世界に来てから、いちばんテンションが上がった大輔だった。

\*\*\*\*\*

作業は、想像していたよりもずっと早く進んでいった。

「サブロー、その石は平らな方を内側にして並べてくれるか？ 寄りかかるのにちょうどいいように」

（ふんが〜！）

「ダイゴ、ナナクサ、丸い砂利を集めて、底に敷きつめてほしいんだ。できれば厚めにしてくれるとありがたい」

（はいほ〜！）（はいほ〜っ！）

……いや本当は、ゴーレムたちは声に出して返事はしないのだけれども。でも仕草を見ていると、なんとなくそう威勢よく応えてくれている気がするのだ。

ある程度の方針と希望、設計がまとまると、皆がとても力になってくれた。

ストーンゴーレムやウッドゴーレムたちは、神殿造りの際にも使われた経験があるそうだ。わりと手際よく穴を掘ったり整地したり、石を組み合わせたりしてくれる。

とはいえ彼らも、作業に使う道具までは作ることができなかった。穴掘りにはサブローの武器であるバカでかい戦槌ウォーハンマーをツルハシがわりに使えた。

けれど、ノコギリなど木を加工する道具については、古くて細かい物は完全に錆ついて使えなかったのだ。

「アデーラさん、この村で、大工道具って手に入りますか？」

しかたが無いので村で相談することにする。

ヨセナの村に入ってすぐに偶然出会った酒場の女主人に訊ねると、「またお客さんになってくれるのう？ うれしいわ」と笑顔で応じられた。

「え？ アデーラさんの店って、大工用具まで取り扱ってたんですね」

「そんなわけないでしょ、もう。ウチの旦那があ、鍛冶屋なのよ」

なるほど、と納得して一緒に連れてきたマゴロクともども、先導する彼女の後を付いていく。

連れて行かれたのは、酒場から少し離れた所にある建物だった。煙突からはもくもくと黒い煙が上がり、中からはキンツキンツと力強く金属が叩き合わされる音が聞こえてきた。

「アンタあ、お客さんを連れて来たわよ」

「……なんだ、客だと？」

ドアがわりに戸口にかけてあったボロ布をめくって顔を出したのは、ヒゲ面を煤すすまみれにした男だった。

(でかつ!?)

身長は大輔よりも、頭ひとつはゆうに高い。

しかもそれ以上に威圧的なのは、がっしりとした体格だった。厚い胸板と信じられないほどに太い腕は、みっしりとした筋肉で覆われている。

片目は眼帯で覆われており、頬にも太い傷が走っている。道で出会っていたら、間違いなく避けて歩く相手だった。

(こりゃ、サブローでも連れてこないと、ケンカで勝てる気がしないな)

思わず反射的にそう考えてしまうほど、剣呑な匂いを発する巨大な男だ。

奥さんのアデーラさんよりは、ずいぶんと歳上に見える。

「アンタか。話は聞いてるよ。もっとも噂の方がずっと多いがな」

「こんにちは。ダイスケです」

「ああ、鍛冶屋のラズロだ。よろしくな。それで何の用だ？」

このガタイもあって、よほど腕っ節に自信があるのか。怖がられているふうには見受けられない。

今日はマゴロクと一緒に、ウッドゴーレムのこいつは魔動甲冑ほど威圧感はない。とはいえ村人に見ると、やはり身構えるのが大抵だったのだけれど。

「ノコギリと、あとノミがいくつか欲しいんですけど」

「それなら、いくつか作り置きもあつたかなあ」

赤々と燃える炉や、大小の金床などが並ぶ工房内に入っていく。外の気温よりずっと熱くて、汗ばむほどだ。

床や作業台にはハンマーやヤットコ、加工中の鉄の塊などが転がっていた。なるほど、こんなのを毎日あつかっていたら、そりゃ筋肉だつてついていくだろう。

「こんなで間に合うか？ 形や大きさが合わなけりゃ、新しく作るかどうかしなきゃなんだが」

「あ、いいんじゃないですかね。どうだ、マゴロク？」

（はいほ〜）

使用するのはいつらだし、ウッドゴーレムが頷くのを見て確認して、ラズロに言う。

「じゃあ、それをお願いします。……えっと、それでお代なんですけど」

「ああ、大丈夫よ。アタシが沢山もらってるからあ」

「……おい。それとこれとは、話が別だろ」

渋い顔をするラズロに、アデーラは身体（とくに胸）を寄せて「何よう。女房の店のお得意さんよ？ アタシの顔を漬すつもりい？」と、なじりながらもベタベタ甘えてみせる。

されたラズロの方は、「え……？ お、おう。じゃあしかたがないか……」と、ちょっと顔をニヤけさせながら、完全に主導権を失っていた。

（なるほど。こんなふうにしてアデーラさんは、この敵いかつい旦那をコントロールしてるのか）

やっぱり年季の入った色気美人は違うなあ、などと彼女に感謝しながら、お礼を言いつつ鍛冶場を後にする。

道具が手に入ったおかげで、木製部品を本格的に作れるようになった。

お湯や水を風呂桶まで引くための桶とけいを頼むと、ウッドゴーレムたちは上手い具合に作ってくれる。

それどころか、スムーズに湯が流れるように高さを調整しながら、樋を並べる土台まで器用に設置してくれた。

「良い出来だね。完璧じゃないか！」

（はいほ〜！（はいほ〜っ！）

こうして工事は、順調に進んでいった。

はじめは戸惑っていたユーリも、途中から魔法で手伝ってくれた。また指を噛んで出血させ、魔力の補給をしなくてはならなかったけれど、温泉の代償だと考えればむしろ格安だ。

「できた〜っ！」

(ふんが〜っ!)

(はいほほ〜っ!)

ほんの数日で、3、4人がゆったりと入れるくらいの立派な岩風呂が完成していた。

半分に割った丸太を掘って作った樋でもって、温泉の湯と、やや上流から引いた小川の水とを流して引きこんでくる。湯と水はそれぞれ量が絞れるようになっていて、これで風呂の温度を調節する設計だ。

湯船から溢れた湯は、また小川に流れ込む。

山の中、緑に囲まれた小川沿いとあって、ロケーションも文句のつけようがない。

源泉かけ流しの、まさに理想を絵にかいたような温泉露天風呂だった。

「さあ、はやくお湯が溜まらないかなあ」

岩風呂に流れ込む温泉をワクワクしながら見ている大輔に、声がかかった。

「失礼します、陛下」

「うん？ どうしたかい」

振り返ると、ユーリが例によって日光のまぶしさに目を眇め、それだけでなくやや緊張した表情を浮かべて立っていた。

濡れた指先をタオルで拭きながら、何事があったかと彼女に向き合う。

「お客様がみえて、陛下と面会したがつております」

「お客さん……村の誰かな？」

「いえ、違います」

首を横に振るユーリの仕草に、厄介事の予感が頭を掠めた。

こういうカンには、嫌なことに、たいてい当たってしまうものだ。

「先代の魔王にお仕えしていた、魔王軍隊長のです。是非、会ってお話したいと」

軽く天を仰いで、大輔はため息をつくのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0644u/>

---

異世界魔王の小規模な日々

2011年6月27日08時36分発行